

明治期の寓話集等に載ったイソップ寓話

吉見 孝夫

一 明治期におけるイソップの普及

明治期は、日本においてイソップの名、その寓話のいくつかが国民的常識となっていく期間であった。ここに詳細に論ずることは省くが、明治三〇年までには、イソップの名が一般に知られ、動物寓話の代名詞となつていく。二〇世紀になつてから明治末までの十余年の間にも十余種のイソップ寓話集が刊行されている。明治とはイソップブームの時代だといつてもあながち過言ではない。そして大正期になると、子ども向け読み物に文芸性を求める鈴木三重吉の『赤い鳥』が現れ、教訓物として主に読まれたイソップの影響力が相対的に弱まる。

明治期にイソップが普及していったのには、四つのルートが考えられる。一つにはイソップ寓話集の刊行がある。筆者の知る限りでは明治期には二十余のイソップ寓話集が出版されている。次に一般の寓話集類の刊行がある。これらにもイソップ由来の話が相当数含まれている。第三に教科書類にもイソップ寓話が教材として採用されている。修身・読本・英語の授業を通して児童・生徒はイソップ寓話を知る。特に国定教科書に採られている場合は、ある時期のある学年のすべての児童が教えられる

のであるから、普及における貢献度は大きい。四番目に新聞・雑誌にも掲載されている。この第四のルートについては既にいくつかの論文を発表した。

尤もこの四つのルートは截然とは区別し難い。イソップ寓話集自体が教科書として使われてもいる。明治期の普及に最大の影響力を持った渡部温の『通俗伊蘇普物語』（明治六年四月）は、修身の教科書とも目されている。

イソップ寓話集の中には、話数は少ないが非イソップの寓話を載せる例もある一方、一般の寓話集といつても半数以上の話がイソップ由来の本もある。このように分類に曖昧さも残るが、区別を厳密にすることが特段の意義を持つわけではない。要は多様な形で人々の目に触れた、その様相を明らかにすることが筆者の目的である。

今回ここに公にするのは第二のルート、イソップ寓話集を除いた一般の寓話集等に掲載されたイソップ由来の寓話である。ここに取り上げたのは多くは寓話集であるが、一般の書籍にイソップ寓話が引用されることがある。それらもこの小論の対象とした。「寓話集等」としたのはその謂である。

なお、明治四五年（一九一二）七月三〇日に大正と改

元されるが、ここでは一九一二年末までを明治期とする。

二 イソップ寓話を掲載する明治期の寓話集等

以下に筆者が調べた範囲で判明した、イソップ寓話を掲載する寓話集等（イソップ寓話集を除く）を時系列で示す。太陽暦が採用されたのは明治六年一月からなので、明治五年までは旧暦の月である。

明治二年（一八六九）

渡部温『経済説略』

三年（一八七〇）

小幡篤次郎『生産道案内』（五月）

五年（一八七二）

福沢諭吉『童蒙教草』（六月）

六年（一八七三）

省己遊人『西洋稚児話の友』（八月）

今井史山『西洋童話』（八月）

加地為也『西洋教の杖』（九月）

七年（一八七四）

西村茂樹『経済要旨』（六月）

一〇年（一八七七）

小幡篤次郎『経済入門 一名生産道案内』（六月）

一九年（一八八六）

池田亀蔵『修身勸』初篇（五月）・次篇（一一月）

二〇年（一八八七）

青木富士『通俗絵入学芸独案内』（五月）

青木富士『日本西洋昔噺』（五月）

川田孝吉『小学生徒教育昔噺』（七月）

綾部乙松『小学生徒修身教育昔話』（一〇月）

二一年（一八八八）

大館利一『修身之教』（五月）

池田亀蔵『修身勸』三篇（六月）

日置岩吉『小学生徒修身教育噺』第一編（六月）・第二編第三編（九月）・第五編（一一月）

大館利一『西洋日本昔噺』（九月）

二三年（一八九〇）

和田万吉『家庭教育修身はなし』（七月）

二四年（一八九一）

西野正勝『尋常小学生徒教育』（七月）

大館利一『児童教育知恵宝』（七月）

木原季四郎『子供のをしえ』（八月）

小池清『通俗修身談』（一〇月）

瘦々亭骨皮道人『面白叢談』（一一月）

二五年（一八九二）

西村寅二郎『教育修身談』（一月）

西野正勝『尋常小学生徒修身話』（一月）

佐藤治郎吉『少年書類新伊蘇普物語』（三月）

鎌田淵海『少年仏教修身はなし』（三月）

森下亀太郎『家庭教育日本修身談』（四月）

秋元政『教育幼稚の宝』（五月）

二六年（一九一三）

この頃坪内雄蔵『英文評釈』か。

二九年（一八九六）

西村寅二郎『教育修身美談』（三月）

三二年（一八九九）

堀三友・秋野茂吉『伊蘇普実伝』（二月）

三五年（一九〇二）

坪内雄蔵『文学叢書 英詩文評釈』（六月）

三八年（一九〇五）

東基吉『家庭童話母のみやげ』（一〇月）

四〇年（一九〇七）

東基吉『教育童話子供の樂園』（四月）

この頃から「少年お伽噺」シリーズか。

四二年（一九〇八）

この頃から「明治少年お伽噺」シリーズか。

この頃から「絵入日本お伽噺」シリーズか。

四三年（一九一〇）

小蝶山人『少年お伽演説』（六月）

馬場直美『お伽百題』（一〇月）

四四年（一九一一）

天籟山人『新お伽十八番』（二月）

鈴木源四郎『少年教育修身はなし 動物の巻』（三月）

三 掲載書の概要と掲載話

前節に示したイソップ寓話掲載の寓話集等の概要と、掲載話のタイトルを示す。寓話の中には、改作、翻案の程度が甚だしく、一読してはイソップと無縁に見えるものもあるが、イソップに基づくと判断される例はここに

採った。イソップ寓話の範囲は、Ben Edwin Perry の *Aesopica* (University of Illinois Press, 1952) に含まれるものの他は、明治期までに日本に入っていた以下の文献に所収の寓話、イソップ伝に限った。

『エンポのハブラス』(ESOPO NO FABVLAS)

仮名草子『伊曾保物語』

Robert Thom『意拾喻言』

Thomas James: *Aesop's Fables*

George Fyler Townsend: *Three Hundred Aesop's Fables*

Charles Stickney: *Aesop's Fables*

なお、当該の寓話集等に、寓話番号等の検索の手がかりがない場合は、該当箇所の丁付、ページをタイトルの下に記した。タイトルの下の括弧内に「A112」等としたのは *Aesopica* の寓話番号である。「アリとキリギリス」で知られる寓話に該当するのは *Aesopica* では二話あり、二つの番号（112・373）を併記した。挿絵のある場合は、括弧内に「絵」と記した。

渡部温『経済説略』（明治二年）

小幡篤次郎『生産道案内』（明治三年五月）

小幡篤次郎『経済入門 一名生産道案内』（明治一〇年六月）

西村茂樹『経済要旨』（明治七年）

『経済説略』は、維新後に徳川家が創設した沼津の兵学校の英語教員であった渡部温（一八三七〜一八九八）が沼津において自身（無尽蔵版）で出版した英語教科書。

主に Richard Whately の *Easy Lessons on Money Matters* (1833) を英語のままに、左開きの和装本に仕立てて翻刻する。これに以下の二話のイソップ寓話が引用されている。詳細は先に小論を公にした注¹。渡部は『通俗伊蘇普物語』を翻訳するに際して、これらの本文を参考にしている。

- 1 Lesson VI On wages Part II (A 112・373)
- 2 Lesson VII Rich and Poor Part III (A 130)

『経済説略』の翻訳には次の二種がある。

小幡篤次郎 (一八四二〜一九〇五) 『生産道案内』(明治三年五月)。東京の尚古堂から出された整版による和装本。訳文は文語体。これには『経済入門 一名生産道案内』(明治一〇年六月、売捌書林丸屋善七) という改訂版があり、こちらは活版による洋装本。訳文に多少の異同がある。

西村茂樹 (一八二八〜一九〇二) 『経済要旨』(明治七年文部省刊。その後各地の出版人の手でも刊行される)。活版による和装本。訳文は文語体。

福沢諭吉『童蒙教草』(明治五年六月)

福沢諭吉 (一八三五〜一九〇一) による、「英人チャンプル氏所著のモラルカラッスブック」(「序」) 即ち William Chambers & Robert Chambers の *The moral class-book* の翻訳。初版は東京の尚古堂から五冊仕立ての和装本として出版された。訳文は文語体。以下のようにイソップ寓話を載せる。

1 第一章 (イ) 「子供と蝦蟆」(*Aesopica* にはない。James 本の 172 *The Boys and the Frogs* と同話)

2 第四章 (イ) 「百姓其子に遺言の事」(A 42)

3 第五章 (イ) 「力の神と御者との事」(A 291)

4 第五章 (ロ) 「麦畑の雲雀の事」(A 325)

5 第八章 (イ) 「仮着したる鳥の事」(A 472)

6 第十章 (イ) 「二疋の蜜蜂の事」(A 80)

7 第十二章 (イ) 「黄金の玉子を生む鶯鳥の事」(A 87)

8 第十二章 (ハ) 「御殿の鼠と田舎の鼠の事」(A 352)

9 第十二章 (ホ) 「蝦蟆の仲間と君を立る事」(A 44)

10 第十三章 (イ) 「蟻と蟲の事」(A 112・373)

11 第十六章 (イ) 「風と日輪と旅人との事」(A 46)

12 第十七章 (イ) 「盗賊雀の事」(A 656)

13 第二十六章 (イ) 「羊飼ふ子供狼と呼びし事」(A 210)

省己遊人『西洋稚児話の友』(明治六年八月)

省己遊人については調べがついていない。「自叙」に「楯岡氏印」の印記があるので、楯岡姓とわかるだけである。

西洋の子ども向けの物語を翻訳した本が少ないので、^{かんぜんちようあく}「勧善懲悪の意を含み専ら稚児の解し易きを主として」^{もつぱ}(「自叙」) 編集された。東京の中外堂から和装で出版される。文語体。全一九話は、イソップや聖書から採った話が多い。

筆者が閲覧した国立国会図書館本には「初集」とあり、巻末の「目録」には「西洋稚児話の友 全二冊」とある

ので、第二集があるものと推定されるが、その存在は確認できていない。

次の一一話がイソップ由来と思われる。二話には見開きの挿絵がある。絵師は小林永濯（一八四三〜一八九〇）。

1 「牛と荷車と骨折比較の事」 2 才（A 45）

2 「人欲深く取らんとして損失せし事」 2 ウ（A 87）

3 「鶴狐の返報する事」 3 才（A 426）

4 「二足の墓水を尋る事」 5 才（A 43）

5 「童子蜂草に刺れたる事」 6 才（Aesopica にはない。

James 本の 130 The Boy and the Nettle と同話）

6 「老人子供に遺言の事」 6 ウ（A 42）

7 「鼯鼠獵士に出会せる事」 8 才（A 150）（絵）

8 「狐己れの恥辱を繕はんとする事」 10 才（A 17）

9 「雲雀巢窟を出る時難に申置事」 11 ウ（A 325）

10 「老人人を樂ませんとして却て恥をかく事」 13 才（A 721）（絵）

11 「狼鶴に恩を報ひざる事」 26 ウ（A 156）

今井史山『西洋童話』（明治六年八月）

「自序」に拠ると、「母の教育かたに依りて賢人とも愚人とも成事なれば」と母親が小学入学前の幼児に読み聞かせることを前提に「亜米利加出版の「リートル」から翻訳した児童書。大坂（大阪）の清規堂から出版する。「ひらかなになしぬれば」とあるように、漢字交じりだが総ルビ。和装で、文体は文語体。「画入」だが、絵師は不明。『漢画独稽古』の著書がある今井自身の手にな

るか。全八話中にイソップ寓話が四話含まれている。全話に挿絵が付いている。

今井史山（一八三一〜一八八五）は本名今井元雄。江戸生まれで養家に入り紀州で医業を営む。他に『理学字解』（明治八年）、『互通用文章』（明治八年）、『漢画独稽古』（明治一三年）の著書がある。

1 「一狼と猫との話」 4 才（Aesopica James 本 Townsend 本にはない。Stickney 本の 88 The Monkey and the Cat

と同話。）（絵）

2 「一驚亀を欺きし話」 6 才（A 230）（絵）

3 「一遠き慮りして却て近き憂ありし事」 14 才

（Aesopica にはない。James 本の 104 The Country Maid

and her Milk-Can と同話）（絵）

4 「一人を愚弄なせば其身も愚弄さるゝ事」 19 ウ（A 426）（絵）

加地為也『西洋教の杖』（明治六年九月）

和装にして、岡田屋嘉七即ち東京の尚古堂から発行された。文体は文語体。加地為也（？〜一八九四）は渡米経験を持つ洋画家。

「凡例」に「此書は米国サアゼント氏教訓書を主として旁ら諸家の書を検索し勸懲寓する要件を撮訳し努めて簡約に従かひ童蒙の見聞に備ふ」とある。「サアゼント氏教訓書」が何かを特定するに至っていない。また「巻中略画を雜ゆる者は童蒙をして倦さらしめんことを要すればなり」と、多くの話に挿絵を付ける。西洋を舞台と

した絵柄から推して原本の挿絵を模したものと思われる。画家の名は明示されていないが、加地が画家であるから自身で描いたのではなからうか。

全五四話中以下の八話がイソップ由来である。

卷之一

1 「第十六 朋友に信なくんば非ざる話」(A 65) (絵)
二の巻

2 「第一 人利の為に汚名を受し話」(A 67) (絵)

3 「第四 狼と小羊との話」(A 155) (絵)

4 「第十三 物毎につき思慮分別すべき話」(A 43)

(絵)

卷之三

5 「第五 父の遺命を遵守し富を得たるの話」(A 42)

6 「第六 己れの分限を知らずして患害を受けたる話」

(A 91) (絵)

7 「第八 友を撰むは我身を安然にする話」(A 194)

(絵)

8 「第十七 己の分に安んじ人を羨むまじき話」(A 230) (絵)

池田亀蔵編『修身勸』初篇(明治一九年五月)・次篇(明治一九年十一月)・三篇(明治二二年六月)

三篇三冊だが、それぞれに刊行時期は異なる。大阪の出版社小川畜善館から出される。池田亀蔵には『天狗の世の中』(明治一九年)、『粹の世の中』(明治一九年)、『スペリング余師』(明治二〇年)などの編著を同じく

小川畜善館から出している。それ以外は不明。第三篇の奥付には校訂者として大館利一の名が載っている。

見開き二ページ分(ときに四ページ分)で話は完結している。全てのページに絵があり、黄表紙のように文と絵とが混在している。絵も見開きで一図となっている。

筆者が見た国立国会図書館本は第三篇の一部が欠けているが、この第三篇を所蔵する図書館は他に確認できない。全七五話中五六話がイソップ寓話。主に『絵入教訓近道』(天保一五―一八四四年)、『通俗伊蘇普物語』(明治六年)と大久保夢遊編『伊曾保物語』(明治一九年)に拠っている^{注二}。『通俗伊蘇普物語』に依拠した話は初篇・次篇・三篇に出現するのに対し、『絵入教訓近道』に基づくのは初篇に、大久保編『伊曾保物語』に基づくのは次篇に限られる。大久保本は明治一九年二月に春陽堂から出されたばかりであり、挿絵まで真似た同年九月刊行の次篇は急ごしらえといえる。和装本で、主に文語体を用いるが、複数の原本に拠っているので文体に統一性がない。挿絵も原本に基づく場合が多いので、江戸風、明治風、西洋風と区々である。

修身書であることを前面に出すためだろう、多くタイトルとして徳目を掲げる。末尾の教訓にしばしば日本、中国の故事を持ち出す。それが本書の工夫したところなのだろうが、話の内容と必ずしも一致しないケースが多い。例えば初篇の「勉強と怠惰」はよく知られる「アリとキリギリス(ここではセミ)」の話だが、教訓に秦の始皇帝が阿房宮を作った例を挙げるといった具合であ

る。

原拠となった文献がわかる場合はその旨を記す。

初篇（明治一九年五月）

1 「〇勉強と怠惰」 1ウ（A 112・373）（絵）

文・絵ともに『絵入教訓近道』の「蟻とせみのはなし」に拠る。

2 「〇人を謀らんとして却て人に謀らる」 2ウ（A 671）（絵）

文・絵ともに『絵入教訓近道』の「狐とにはとりのはなし」に拠る。

3 「〇自慢にほこる時は却て損を招く」 3ウ（A 294）（絵）

絵は『絵入教訓近道』の「くじやくとつるのはなし」に拠る。文は同書のを改変したか。

4 「〇小鳥の教諭」 5ウ（A 627）（絵）

文・絵ともに『通俗伊蘇普物語』の「第二百廿二小鳥の教諭の話」に拠る。

5 「〇後に悔ゆとも及ぶ事無し」 6ウ（A 640a）（絵）

文・絵ともに『絵入教訓近道』の「人とかつばのはなし」に拠る。ただし絵の構図は異なる。

6 「〇恩を知らざるは獣類よりも劣れり」 8ウ（A 235）（絵）

7 「〇他人の勸により心を移すこと勿れ」 9ウ（A 352）（絵）

文・絵ともに『絵入教訓近道』の「京都の鼠と田舎の鼠」に拠る。

8 「〇世渡りは下見てくらせ」 10ウ（A 230）（絵）

文は『通俗伊蘇普物語』の「第四百四十五海亀と鷺の話」に拠る。

9 「〇才は身を守る」 11ウ（A 581）（絵）

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百五童子と盗人の話」に拠る。

10 「〇油断大敵」 23ウ（A 281）（絵）

文・絵ともに『通俗伊蘇普物語』の「第三百十八閻鶏と鷺の話」に拠る。

11 「〇悪人に善事を勧められは却て禍を招く」 24ウ（A 156）（絵）

文・絵ともに『絵入教訓近道』の「狼と鶴のたとへ」に拠る。

12 「〇悪事は決して行ふべからず」 25ウ（A 32）（絵）

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百二十六兇殺人の話」に拠る。

13 「〇拵へたる案山子は鳥も能く之を知る」 26ウ（A 297）（絵）

14 「〇過たるは猶及ばざるか如し」 27ウ（A 24）（絵）

文は『通俗伊蘇普物語』の「第九十二喰過た鼠の話」に拠る。

15 「〇遠き慮なければ必ず近きうれひあり」 28ウ（A 124）（絵）

文は『絵入教訓近道』の「鴉ときつねのはなし」に拠る。

16 「〇善事は悪事の敵なり」 29ウ（A 122）（絵）

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百十五 盜賊と鶏の話」に拠つて改変する。

17 「○自慢をすれば恥をかくことあるべし」 30ウ (A 521) (絵)

18 「○道に違ふべからず」 31ウ (A 203) (絵)

19 「○勞すれば巧あり」 32ウ (A 291) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第五十一 ヘルキユス権現と車引の話」に拠る。

次篇 (明治一九年一月)

二三丁裏とあるべき箇所が三三丁裏となつており、以後一〇丁分とぶ。三五丁裏とあるべき箇所が四五丁裏となり、以後さらに一〇丁分とぶ。

20 「金言耳にさかふ」 2ウ (A 74) (絵)

文・絵ともに大久保夢遊編『伊曾保物語』の「かのしかの事」に拠る。

21 「腹と五体の事」 3ウ (A 130) (絵)

文・絵ともに大久保編『伊曾保物語』の「腹と五体の事」に拠る。

22 「基なき枝に花咲ず」 4ウ (A 133) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第十八 犬と牛肉の話」に拠る。

23 「信義なくば身を亡す」 5ウ (A 566) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第八十六 鳥と獸との戦の話」に拠る。

24 「濫信は身を亡す」 6ウ (A 9) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二 狐と野羊の話」

に拠る。

25 「入るに易し出るに難し」 7ウ (A 142) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第百 獅子の病氣の話」に拠り、獅子を猪に変える。

26 「後悔先にたゝず」 8ウ (A 234) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第八十七 狼へ留守を頼んだ牧羊奴の話」に拠る。

27 「信無き朋友に交る事勿れ」 9ウ (A 65) (絵)

文・絵ともに『通俗伊蘇普物語』の「第三十六 旅人と熊の話」に拠る。

28 「過分の誇りは身を窘る」 10ウ (A 472) (絵)

文・絵ともに『通俗伊蘇普物語』の「第四 呆鴉の話」に拠る。

29 「天賦の貨に非れば身を益せず」 11ウ (A 67) (絵)

文・絵ともに『通俗伊蘇普物語』の「第八十八 二人の同伴斧を拾ふ話」に拠る。

30 「我は一尺人は一寸なり」 12ウ (A 370) (絵)

31 「人を謀れば又謀らる」 15ウ (A 426) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第百九 狐と鶴の話」に拠る。絵は大久保編『伊曾保物語』の「つるときつねの事」に拠るか。

32 「楽は苦の種」 16ウ (A 180) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第百十四 馬と荷を負た驢馬の話」に拠る。

33 「誇りは身を亡す」 17ウ (A 376) (絵)

文・絵ともに大久保編『伊曾保物語』の「かいると

うしの事」に拠る。

34 「〇勉強は富を得る基」18ウ (A 42) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第四十四 百姓と児輩の話」に拠る。

35 「父母は天地の如し」19ウ (A 1) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第九 鷲と狐の話」に拠る。

36 「獅子と鼠の話」21ウ (A 150) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二十四 獅子と鼠の話」に拠る。

37 「交るに信無くば終に友を失ふ」22ウ (A 35) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第十七 樵夫と山霊の話」に拠る。

38 「忠臣は二君に仕へず」33ウ (A 44) (絵)

文・絵ともに大久保編『伊曾保物語』の「かはづが主君をのぞむ事」に拠る。

39 「知なければ愚人とす」34ウ (A 384) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第十五 蛙と鼠の話」に拠る。

40 「慢気は身を亡す」46ウ (*Aesopica* にはない。仮名草子『伊曾保物語』の下巻第二七話「かはらけ慢気をおこす事」(絵)

文は大久保編『伊曾保物語』の「かはらけ慢気をおこす事」に拠る。

三篇 (明治二十一年六月)

41 「〇怠者は功をなさず」1ウ (A 226) (絵)

42 「〇君父の命これ従へ」2ウ (A 92) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百四 二足の畜犬の話」に拠る。

43 「〇自からなせる禍はのがれがたし」3ウ (A 276) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百六十一 鷲と矢の話」に拠る。

44 「〇我本分を守るべし」6ウ (A 91) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第四十六 驢馬と狒狗の話」に拠る。

45 「〇彼のうらみは我身を殺ぐの利刀なり」7ウ (A 51) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百十八 農夫と蝮蛇の話」に拠る。

46 「〇人は善悪の友に由る」8ウ (A 237) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百七 馬と買客の話」に拠って改変したか。

47 「〇心こゝにあらざれば過多し」9ウ (*Aesopica* にはない。James 本の 104 The County Maid and her Milk-Can と同話) (絵)

文・絵ともに『通俗伊蘇普物語』の「第一百十三 田舎娘と牛乳壺の話」に拠る。

48 「〇人をみてわが能を誇りかたる事なかれ」10ウ (*Aesopica* 'James 本' Townsend 本にはない。Stickney 本の 5 The Drum and the Vase of Sweet Herbs と同話) (絵)

49 「○事々物はその恩を思へ」 12ウ (A 175) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百五十九 旅人と楓樹の話」に拠る。

50 「○一事の失錯他事に及ぶ」 13ウ (A 214) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百五十二 母と児の話」に拠る。

51 「○足ることを知れ」 15ウ (A 117) (絵)

52 「○德行を磨けよ」 17ウ (A 499) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百廿八 男児と女児の話」に拠る。

53 「○人を計れば我亦人にはからる」 26ウ (A 562 a)

(絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百廿七 狐と鶏の話」に拠って改変する。

54 「○虚妄を云へば即ち人に嘲けらる」 28ウ (A 14)

(絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百三十 猿の自慢の話」に拠る。

55 「○人の運はその身の行為に従ふ」 31ウ (A 174)

(絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百十四 旅人と運の神の話」に拠って改変する。

56 「○耐忍すれば不幸も幸福となる」 33ウ (A 218) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百廿五 牝狼と犬の話」に拠って改変する。

青木富士『通俗絵入学芸独案内』(明治二〇年五月)
青木富士『日本西洋昔噺』(明治二〇年五月)

『通俗絵入学芸独案内』は「三府繁盛記」「新体詩歌」といった最新知識や作文の書き方を記した啓蒙書である。この本の中に、上段に「西洋昔噺」二〇話、下段に「日本昔噺」六話を掲載した部分がある。この東西の昔噺を、そのままの版で独立させて同時に出したのが『日本西洋昔噺』である。

「西洋昔噺」二〇話はすべてイソップ寓話である。「日本昔噺」を含め、昔噺にはすべて挿絵が付いている。本文は文語体で、漢字はほぼ総ルビである。

青木には他に『正則英語自在』(明治一九年)、『英語早学』(明治二〇年)、『作文独案内』(明治二〇年)、『交際必携西洋礼式』(明治二〇年)等の編著があり、全て大阪の出版社嵩山堂から刊行されている。「出版人」が青木自身となっているので、青木が創設した出版社である。「嵩山」の社名も「青木富士(青き富士)」と符合する。

- 1 「鹿が誇りて命を失し話」 1 (A 74) (絵)
- 2 「蟻と鼠の話」 2 (A 112・373) (絵)
- 3 「狐と鳥の話」 4 (A 124) (絵)
- 4 「狼と鶴の話」 6 (A 156) (絵)
- 5 「猫と雄の話」 8 (A 16) (絵)
- 6 「狼と獅子の話」 10 (A 347) (絵)
- 7 「野兎を追ふ獵犬の話」 11 (A 331) (絵)
- 8 「狐と豹の話」 13 (A 12) (絵)

- 9 「猿と駱駝の話」 14 (A 83) (絵)
- 10 「游泳する小児の話」 16 (A 211) (絵)
- 11 「婦人と牝鶏の話」 17 (A 58) (絵)
- 12 「人とサザンヤの話」 18 (A 35) (絵)
- 13 「蛙が王を懇請する話」 20 (A 44) (絵)
- 14 「驢馬と馭者の話」 23 (A 186) (絵)
- 15 「猿と海豚の話」 24 (A 73) (絵)
- 16 「驢馬と狼の話」 27 (A 187) (絵)
- 17 「熊と二個の旅人の話」 29 (A 65) (絵)
- 18 「鼠と蛙と鷺の話」 31 (A 384) (絵)
- 19 「喇叭子が俘虜にせらる話」 33 (A 370) (絵)
- 20 「病める鹿の話」 35 (A 305) (絵)

川田孝吉『小学生徒教育昔噺』第一巻、第五巻 (明治二〇年七月)・第六巻 (明治二〇年十一月)・第七巻 (明治二十一年一〇月)

小学生向けに、修身の徳目に合う話を集め編集した書。全七巻七冊の和装本。刊記に従えば第五巻までは「明治二十年七月出版」、第六巻は「明治二十年十一月出版」、第七巻は「明治二十一年十月出版」である。明治二〇年一〇月に第一・二巻、第三・四巻、明治二〇年一二月に第五・六巻と二巻ずつ洋装仕立てに合冊されても出版されているが、版は同じ。川田は松廼家緑の号をもつ。文体は文語体。第四巻は六話を収めるが、他は各編五話で構成されている。全話に挿絵が付いている。全三六話中三二話がイソップに由来する。東京の開文堂書舗から出

版される。川田は啓蒙的な著書をいくつか持つ。

第一巻

- 1 「豪家の主人馬を察る話」 1ウ (A 237) (絵)
 - 2 「壮年の男栗鐘となる話」 2ウ (A 31) (絵)
 - 3 「野馬の踊舞不興となる話」 4ウ (A 83) (絵)
 - 4 「太陽と風の神との争論話」 5ウ (A 46) (絵)
 - 5 「偶郎驚怖て席上を逃る話」 6ウ (A 33) (絵)
- 第二巻
- 6 「鶏の頓才危難を逃る話」 1ウ (A 562 a) (絵)
 - 7 「乗馬と田舎馬とのはなし」 3オ (A 357・565) (絵)
 - 8 「鼠と蛙災厄に罹るはなし」 4ウ (A 384) (絵)
 - 9 「父二人の小童を教訓する話」 5ウ (A 499) (絵)
 - 10 「小童と金平糖のはなし」 6ウ (Aesopica にはない。

James 本の 147 The Boy and the Filberts と同話) (絵)

第三巻

- 11 「小童人を誑して焼死ぬ話」 1ウ (A 210) (絵)
- 12 「鼠猫難を避んと集会する話」 3オ (A 613) (絵)
- 13 「多くの蛙小童に殺さる話」 6オ (Aesopica にはない。James 本の 172 The Boys and the Frogs と同話)

(絵)

- 14 「狐獅子を軽侮て裂れる話」 7オ (A 10) (絵)

第四巻

- 15 「旅人垂眠して豁へ陥らんとする話」 1ウ (A 174) (絵)
- 16 「狼乳母に誑されて空く山へ帰る話」 2ウ (A 158) (絵)

17 「蠅吸飲すぎて命を失はんとする話」 4 才 (A 80)

18 「鶴の鳥田鶴と遊んで災難に遇ふ話」 4 ウ (A 194)

19 「傘やと煉化工の妻雨天の喜憂話」 6 才 (A 94) (絵)

20 「小魚釣師を謀らんとする話」 7 才 (A 18) (絵)

第五卷

21 「虎と牛と競争をする話」 1 ウ (A 226) (絵)

22 「商家の丁稚盗人を謀る話」 3 才 (A 581) (絵)

23 「猟犬が鹿を追かけるはなし」 4 ウ (A 331) (絵)

24 「鳥と獣と戦争を發る話」 5 ウ (A 566) (絵)

25 「怠惰もの福の神を祈る話」 7 才 (A 174) (絵)

第六卷

26 「驢馬。洋犬の真似をして打倒さる話」 1 ウ (A 91) (絵)

27 「賊人の賄賂。飼犬に察せらるはなし」 3 才 (A 403)

28 「亀の子。虚空より落ちて。命を失ふ話」 5 才 (A 230) (絵)

第七卷

29 「洋灯大言して風に吹き消さるゝ話」 1 ウ (A 349) (絵)

30 「農夫仏神を祈りて車を動かさんとする話」 2 ウ (A 291) (絵)

31 「狐我子多きに誇りて獅子に怒らるゝ話」 5 ウ (A 257) (絵)

32 「蚊が牛に言ふて却て嘲弄せらるゝ話」 7 才 (A 137) (絵)

綾部乙松『小学生徒修身教育昔話』(明治二〇年一〇月)

これも小学生向けに、修身の徳目に合う話を集め編集した書。発行者は東京の瀬山佐吉。綾部乙松は梅廼家馨の号を持つ。刊記には「綾部乙松」とあるが、他の著書には「綾部」とあるので、「陵」は誤字であろう。和装本。文体は一部口語体もあるが原則的には文語体。全六話に挿絵が付いている。その中の四話がイソップに由来するが、いずれも改変を施している。川田孝吉『小学生徒教育昔話』とは書名、著者の号、本の作りも類似しており、両者は何らかの関係があるかと想像されるが、現在のところ不明である。

綾部は啓蒙的な著書をいくつか持ち、その中には英語関係の書もあるが、いずれも単語帳のようなものであり、どの程度の英語力を有していたのかはわからない。

1 「〇蜜蜂と蜻蛉の話」 7 (A 112・373) (絵)

2 「〇鳥合戦の話」 9 (A 566) (絵)

3 「〇蠅と蜘蛛の話」 12 (A 521) (絵)

4 「〇馬と犬の話」 14 (A 565) (絵)

大館利一『修身之教』(明治二二年五月)

この時期多く出版された小学生向け修身寓話集の一つ。発行者は大坂(大阪)の安井兵助。大館利一も大坂の人。文体は文語体。大館は先に挙げた池田亀蔵の『修

身勸』第三篇の校訂者でもある。手品の種本、歴史書、字引など多ジャンルに亘る啓蒙書や実用書の編者ともなっているが、その内容は浅く、通俗書の域を出ない。

各話は見開き二ページで完結し、挿絵が付く。全三八話中二三話がイソップに由来する。多くは『通俗伊蘇普物語』に依拠している。修身書であるので、徳目をタイトルとする。

1 「〇其器なければ則ちその位に居るべからず」 10 (A 81) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百三十三 狐と猿の話」に拠る。

2 「〇不明瞭なるは実行しがたし」 12 (A 43) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百二十 二疋の蛙移住の話」に拠る。

3 「〇狡猾なるものと与に語るべからず」 20 (A 12) (絵)

4 「〇勇進せよ」 24 (A 340) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第三百三十四 射術の達人と獅子の話」に拠る。

5 「〇人見て法説け」 38 (A 35) (絵)

6 「〇騙おほきものは人に見すてらる」 40 (A 73) (絵)

7 「〇祈る暇あれば働け」 42 (A 285) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百十九 福神と彫像工の話」に拠る。

8 「〇悪人はよく非を理に云ひなす」 46 (A 155) (絵)

9 「〇人は身勝手」 48 (A 17) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第五百十 無尾狐の話」

に拠る。

10 「〇悪友には決して交るべからず」 50 (A 237) (絵)

11 「〇飲食の交りは害あり」 52 (A 305) (絵)

12 「〇小黠するものは大黠に計られます」 54 (A 57) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百五十一 老婆と医者」の話に拠る。

13 「〇身分不相応の威をふるふは禍にあふの基」

56 (Aesopica にはない。仮名草子『伊曾保物語』の巻第四〇話「獅子王と驢馬の事」) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百十七 驢馬の自慢の話」に拠る。

14 「〇知らぬ事を知りがほにする」 58 (A 355) (絵)

15 「〇嘆はしいかな詐術の跋扈」 60 (A 355) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百九 信の神と旅人の話」に拠る。

16 「〇悪るい性質ははやくより知るゝ／＼しみ給へや各位」 66 (A 37) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第四百十八 盲人と狼児の話」に拠る。

17 「〇前門虎口をのがれ後門獅子に遇ふ」 80 (A 76) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百十六 鹿と獅子の話」に拠る。

18 「〇新もの嗜失敗」 82 (A 6) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第六十六 山野羊を取失つた野羊飼の話」に拠る。

19 「〇己の本分を守れ」 84 (A 139) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第四百十一 海鷗と鳶の話」に拠る。

20 「○我身つめて人の痛さを知れ」 86 (A 414) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百廿三 牝獅子と獅夫の話」に拠る。

21 「○不顧者の自負」 88 (A 213) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第四百十七 柘榴と林檎と覆盆子の話」に拠る。

22 「○他人の食寄する勿れ」 116 (A 305) (絵)

23 「○その身の本分を知れ」 120 (A 83) (絵)

日置岩吉『小学生徒修身教育嚆』第一編(明治二十一年六月)・第二編第三編(明治二十一年九月)・第五編(明治二十一年十一月)

これも小学生向け修身寓話集。文体は文語体。大阪の赤志忠雅堂刊。奥付に「著作兼発行者」として日置の名が載っている。赤志忠雅堂は日置の創設した出版社かと推定される。日置については同社から明治二一、二二年に運動遊戯本やら音曲本やらを出しているのが知られるだけである。

第二編・第三編は合冊となっている。第四編は所在不明につき未見。いくつかには挿絵が付いている。イソップに由来するのは、第一編全二話中一九話、第二編全一〇話中八話、第五編全一〇話中四話である。第三編は目録によれば全一四だが、筆者が見た国立国会図書館本は二話の本文のみで、他は欠けている。

第一編(明治二十一年六月)

1 「○虎と他の獣と狩に出た話」 2 (A 339)

2 「○父男女子に教示する話」 2 (A 499) (絵)

3 「○些少の恩も忘べからざる話」 4 (A 175) (絵)

4 「○獅子と鯨と盟をなす話」 6 (A 145)

5 「○鹿と海との話」 7 (A 168) (絵)

6 「○狼野羊を欺す話」 9 (A 157) (絵)

7 「○老父と姉妹の処女の話」 11 (A 94)

8 「○二個の風鈴の話」 14 (A 378)

9 「○蝶々大象の頭に止る話」 15 (A 137) (絵)

10 「○銘酒空壘の話」 16 (A 493)

11 「○狼虚言を知らざる話」 17 (A 158) (絵)

12 「○鹿恩を忘れて殺さるゝ話」 18 (A 77)

13 「○農夫時計を失なふ話」 19 (A 55) (絵)

14 「○運の神の話」 20 (A 174)

15 「○剛臆は危難に臨と分る話」 22 (A 326)

16 「○栗鼠虫の美声を感ず話」 23 (A 184) (絵)

17 「○危急を助は論に及ぬ話」 25 (A 211)

18 「○狐獅子へ奉仕する話」 26 (A 394) (絵)

19 「○驢馬の失錯の話」 27 (A 180) (絵)

第二編(明治二十一年九月)

20 「○正直者益を得る話」 2 (A 173) (絵)

21 「○我愁ければ他つらしの話」 4 (A 414)

22 「○鵲に鳥が馴るゝ話」 5 (A 10) (絵)

23 「○蝙蝠禽鳥畜獸に憎るゝ話」 7 (A 566) (絵)

- 24 「○獣一類の多少を論ず話」 11 (A 257)
- 25 「○空氣洋灯大言を吐く話」 12 (A 349)
- 26 「○兎危難に遇ふ話」 13 (A 32) (絵)
- 27 「○善を施せば善報ある話」 14 (A 235) (絵)
- 第三編 (明治二十二年九月)
- 28 「○飾りより実用の話」 2 (A 74)
- 第五編 (明治二十二年一月)
- 29 「○言の曖昧信を失ふ話」 5 (A 35) (絵)
- 30 「○貨幣を産む鶏の話」 11 (A 87) (絵)
- 31 「○星学者足下の難を知らざる話」 14 (A 40) (絵)
- 32 「○高木風に憎るゝ話」 15 (A 70)

大館利一『西洋日本昔噺』(明治二十二年九月)

大坂(大阪)の文欽堂から発行された。発行者が大館自身になっているから、文欽堂は大館の創立した出版社か。

上段に「日本はなしの部」四四話、下段に「西洋はなしの部」四〇話を載せる。書名といい、体裁といい青木富士の『日本西洋昔噺』に酷似するので、これを模倣したかと思われるが、採用された話は、日本のも西洋のも大きく異なる。「ます」を用いた口語体。殆どの話に挿絵を付ける。

「西洋はなしの部」四〇話中、三四話がイソップに由来する。大館には先に挙げた『修身之教』があるが、両者に共通するイソップ寓話はない。殆どが『通俗伊蘇普物語』に依拠していると思われる。しばしば登場動物や

舞台設定を変えているが、偶然とは思われない程に類似の文、表現が使われているからである。いくつかの話を除けば、『通俗伊蘇普物語』の改作本といつてもよい。大館が利用し得た『通俗伊蘇普物語』には再版(明治八年)もあるが、初版(明治六年)に拠っていることが、8「鳶と狼のはなし」から判明する。これは渡部温が初版で *kid* を *kite* と誤読し、「鳶」と訳してしまったもので、再版では訂正している。

- 1 「●熊の入婿のはなし」 5 (A 140) (絵)
- 文は『通俗伊蘇普物語』の「第四十二 獅子の恋慕の話」に拠る。
- 2 「●警察署にすむ雀の話」 8 (A 227) (絵)
- 文は『通俗伊蘇普物語』の「第八十六 裁判所に住む燕の話」に拠る。
- 3 「●羊飼と羊のはなし」 14 (A 212) (絵)
- 文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百五十四 嫠婦と綿羊の話」に拠る。
- 4 「●蠟燭の火の話」 21ノ5 (A 349) (絵)
- 文は『通俗伊蘇普物語』の「第六十三 灯火の話」に拠る。二一ページだが「21ノ5」とあり、次は二六ページとなる。
- 5 「●片目の鹿の話」 26 (A 75) (絵)
- 文は『通俗伊蘇普物語』の「第三十四 片目の鹿の話」に拠る。
- 6 「●驚と鷹の話」 28 (A 62) (絵)
- 文は『通俗伊蘇普物語』の「第四十 海豚と鰻魚の話」

に抛り、登場動物を変える。

7 「●牛乳と蠅とのはなし」 29 (A 80) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二十 蠅と蜜壺の話」に抛る。

8 「●鷹と狼のはなし」 30 (A 98) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』初版の「第八 鷹と狼の話」に抛る。これにより、初版に依拠していることがわかる。

9 「●狼と猿とのはなし」 32 (A 157) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百八十七 断崖の上に立た野羊の話」に抛る。

10 「●痴息と生垣のはなし」 33 (Aesopica にはない。James

本の 161 The Hedge and the Vineyard と同話) (絵)
文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百八十四 樹籬と葡萄園の話」に抛る。

11 「●羊の皮を着た狼の話」 35 (A 451)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百七十七 羊の皮を着た狼の話」に抛る。

12 「●駱駝のはなし」 36 (A 287) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百八十一 亜刺比亞人と駱駝の話」に抛る。

13 「●羊と豚のはなし」 37 (A 85) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百八十三 豚と羊の話」に抛る。

14 「●獅子と狼のはなし」 40 (A 347) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百九十四 狼と獅子の

話」に抛る。

15 「●駄賃馬と乗馬とのはなし」 42 (A 357・65) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百二十五 乗馬と驢馬の話」に抛る。

16 「●草と鹿とのはなし」 44 (A 77)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第九十六 鹿と野葡萄の話」に抛る。

17 「●網にかゝる魚のはなし」 47 (A 282)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百二十一 大魚と小魚の話」に抛る。

18 「●片いちわるき馬と馬子のはなし」 48 (A 186) (絵)

文・絵ともに『通俗伊蘇普物語』の「第一百七十五 驢馬と圉夫の話」に抛る。

19 「●太陽の嫁とりのはなし」 50 (A 314) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第七十一 日輪の妻迎の話」に抛る。

20 「●黄金の卵をうむ鶏のはなし」 52 (A 87) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第七十九 驚黄金の卵を産む話」に抛る。

21 「●象と蚊のはなし」 54 (A 137)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第六十九 蚊と牛の話」に抛る。

22 「●虎と他獣のはなし」 55 (A 514) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第七十四 獅子王と相談獣の話」に抛る。

23 「●虎と獅子とのはなし」 56 (A 338) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第七十八 獅子と野羊の話」に拠る。

24 「●獅子にかまれた狼のはなし」 58 (A 160) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第六十一 犬に噛れた狼の話」に拠る。

25 「●松と芒とのはなし」 60 (A 70) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第六十五 橡櫚と蘆の話」に拠る。

26 「●羊を誑誘る狐のはなし」 62 (A 191) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第九十四 驢馬を誑誘る狐の話」に拠る。

27 「●星学者のはなし」 64 (A 40) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百十八 天文者の話」に拠る。

28 「●女羊と狼のはなし」 65・77 (A 97) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百二十一 牝野羊と狼の話」に拠る。六五ページは「六十五」「七十七」と二つのページ付けがあり、次ページは「七十八」と続く。

29 「●海と川のはなし」 80 (A 412) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百二十三 河と海の話」に拠る。

30 「●鉄瓶と急須と同行するはなし」 82 (A 378) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第七十五 一双の壺の話」に拠る。

31 「●矢の束のはなし」 84 (A 53)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第五十七 薪の束の話」に拠る。

32 「●老ぼれた虎のはなし」 102 (A 481) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第九十五 老衰の獅子の話」に拠る。

33 「●虚言をつく小児のはなし」 104 (A 210) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第三十 牧童と狼の話」に拠る。

34 「●雀と農夫とのはなし」 107 (A 325) (絵)

和田万吉『家庭教育修身はなし』(明治三三年七月)

これも修身書の一つ。母親が子に本を示している絵が表紙に描かれているので、児童自身が読むと共に、親子に読んで聞かせることも意図しているのである。角書きの「家庭教育」もその意図を含むものと思われる。東京の双々館から刊行される。文語体。和田万吉(一八六五―一九三四)はこれを出版した明治二三年に東京帝国大学文科大学国文科を卒業し、後に同大学附属図書館長となり、図書館学の先駆者として知られる人物。

全四八話中七話がイソップ寓話に基づく。

1 「◎吝嗇な人の話」 6 (A 225) (絵)

2 「◎蟹の親子の話」 26 (A 322)

3 「◎蜂と鳩とのはなし」 32 (A 235) (絵)

4 「◎漁師と小魚との話」 57 (A 18)

5 「◎水車師と駱駝とのはなし」 64 (Aesopica にはない。

Stickney 本 97 The Arab and his Camel へ同話) (絵)

- 6 「◎かふもり（蝙蝠）のはなし 第一」 71（A 566）
7 「◎熊と二人の旅行者との話」 86（A 65）

西野正勝『尋常小学生徒教育』（明治二四年七月）

西野正勝『尋常小学生徒修身話』（明治二五年一月）

『尋常小学生徒教育』は「はなしの部」「孝子の部」「歴史門」「演説の部」「祝文」から成る学習書。「はなしの部」を版もそのままに独立させ、序文を付け加えて翌年『尋常小学生徒修身話』と題して出版する。いずれも大阪の浜本明昇堂刊。全四〇話の中に、イソップ寓話が二五話含まれている。地の文は文語体だが、会話は口語体。西野は修身、作文などの教育書を浜本明昇堂から出版している。

- 1 「◎蟻と蟋蟀との話」 1（A 112・373）
2 「◎蛙と鼠の話」 2（A 384）
3 「◎蟻と鳩との話」 3（A 202）
4 「◎盗人と母の話」 5（A 202）
5 「◎蛙の主人を求る話」 6（A 44）
6 「◎田舎鼠と都鼠の話」 8（A 352）
7 「◎蛙と牛の話」 10（A 376）（絵）
8 「◎兎と亀の話」 11（A 226）
9 「◎鳥と獣との戦い」 12（A 566）
10 「◎旅人と熊の話」 13（A 65）
11 「◎衆鼠が寄集ひて相談する話」 14（A 613）
12 「◎驢馬と主人の話」 17（A 179）
13 「◎鴉と孔雀の話」 18（A 472）

- 14 「◎蟻と蟻との話」 19（A 521）

15 「◎法師と盗人の話」 20（Aesopica にはない。仮名草子『伊曾保物語』の下巻第三四話「出家と盗人の事」と同話）

16 「◎水車師と駱駝との話」 23（Aesopica にはない。Stickney 本の 97 The Arab and his Camel と同話）

和田万吉『家庭教育修身はなし』の「水車師と駱駝とのはなし」とほぼ同文。

- 17 「◎旅人と狼の話」 24（A 569）
18 「◎飼犬と狼の話」 29（A 346）
19 「◎旅人と楓樹の話」 31（A 175）
20 「◎海亀と鷺の話」 31（A 230）
21 「◎老婆と医者の話」 32（A 57）
22 「◎狼と鶴の話」 34（A 156）
23 「◎漁人笛を吹く話」 34（A 11）
24 「◎犬と鶏と狐との話」 40（A 252）
25 「◎虚言をつく小児話」 41（A 210）

大館利一『児童教育知恵宝』（明治二四年七月）

手紙の書き方や計算法、絵の描き方などを記した初歩的な学習書。発行者は大阪の刀根松之助。その中に「修身のをしへ」という項目があり、動物寓話を七話載せる。そのうち六話がイソップ寓話に基づく。この六話は、先に挙げた大館の『修身之教』と共通するが文は同一ではない。文語体で各話に挿絵が付く。絵は『修身之教』によく似る。徳目をタイトルとするのも同様。

「修身のをしへ」

- 1 「●人は身勝手」 10 (A 17) (絵)
 - 2 「●偽をつくものは人に見捨たる」 10 (A 73) (絵)
 - 3 「●己が本業を守れ」 12 (A 139) (絵)
 - 4 「●己不相応の威をふるふは禍のもと」 12
- (Aesopica にはない。仮名草子『伊曽保物語』の中
巻第四〇話「獅子王と驢馬の事」と同話) (絵)
- 5 「●狡猾なものと共にかたるべからず」 14 (A 12) (絵)
 - 6 「●他人の喰より」 14 (A 305) (絵)

木原季四郎『子供のをしえ』(明治二十四年八月)

東京のやまと新聞社刊。「ます」を用いた口語体。木原についてはこの本の編者以外の事跡は全く不明である。教訓的な話や行儀作法を収める。全二七話のうち三話がイソップ寓話の改作である。

- 1 「◎虱と蚤の駆ッ競」 4 (A 226)
- これは後述の瘦々亭骨皮道人『面白叢談』の「子供衆のお耳を拝借」とほとんど同文。
- 2 「◎虚言は信を失ふの基」 5 (A 210)
- 3 「◎鷹と雀」 9 (A 10)

小池清『通俗修身談』(明治二十四年一〇月)

西村寅二郎『教育修身談』(明治二十五年一月)

西村寅二郎『教育修身美談』(明治二十九年三月)

小池清の『通俗修身談』は名古屋の共同出版社刊。小

池も名古屋在住者。修身の役に立つ話をまとめて一書としたもので、「寓意修身話」三九話、「修身正話」三六話から成る。前者のうち一七話がイソップ寓話。後者は主に日本、中国、ヨーロッパの歴史上の逸話を採る。地の文は文語体だが、会話は口語体。一八九〇年前後に「小池清」の著作がいくつかあるが、同一人物かは確かではない。それ以外は不明。

西村寅二郎の『教育修身談』は東京の東雲堂刊。『通俗修身談』と全く同内容。『通俗修身談』と同版に見えるほどそっくりの文字面だが、詳細に比べると異体の仮名の使用に差異がある。

西村の『教育修身美談』は東京の大日本図書出版社刊。『教育修身談』を改題しただけのもの。版も同じ。

西村は一八九〇年代に都々逸、端唄などの本をいくつか出している。文廼家主人を称する。それ以外は不明。同一書が別編者の名で出版された事情は不明である。

イソップからの一七話の多くは仮名草子『伊曽保物語』に依拠する。依拠した『伊曽保物語』中の話は、すべて明治一九年に刊行された大久保夢遊編『伊曽保物語』に掲載されているので、おそらく大久保編本に基づくのであろう。

- 1 「●蟻と蠅との話(勤儉)」 3 (A 112・373) (絵)
- 2 「●馬と馬丁との話(点詐)」 7 (A 319)
- 3 「●人を殺して一身を失ひし話(敗徳)」 7 (A 32)
- 4 「●蝙蝠と鼯鼠との話」 13 (A 172)
- 5 「●蜂と蟋蟀との話」 30 (A 112・373)

- 6 「●狐と鶏との話（利己）」 36（A 671）
 仮名草子『伊曾保物語』の中巻第三五話「庭鳥と狐との事」とほぼ同文。
- 7 「●猿と犬との話（克信）」 38（A 218）
 仮名草子『伊曾保物語』の下巻第二六話「猿と犬との事」とほぼ同文。
- 8 「●蠅と蟻との話（侮軽）」 39（A 521）
 仮名草子『伊曾保物語』の中巻第二八話「蠅と蟻との事」とほぼ同文。
- 9 「●五体と腹との話（扶翼）」 40（A 130）
 仮名草子『伊曾保物語』の中巻第三六話「腹と五体の事」に拠り、多少表現を変える。
- 10 「●鷺と鴉との話（殘忍）」 41（A 2）
 仮名草子『伊曾保物語』の下巻第一二話「鷺と鳥の事」に拠り、多少表現を変える。
- 11 「●愚人怒りて神体を打碎きし話」 42（A 285）
 仮名草子『伊曾保物語』の下巻第一五話「ある人仏を祈る事」に拠る。ただし、像をこわす場面を欠いているため、理解不能の話となっている。
- 12 「●狼と羊との話（貪婪）」 43（A 155）
 「●鼠の集会（実行）」 50（A 613）
 仮名草子『伊曾保物語』の下巻第一七話「鼠の談合の事」に拠るが、表現はかなり変える。
- 14 「●鳩と鷺との話（嚴肅）」 51（A 486）
 仮名草子『伊曾保物語』の中巻第二六話「鳩と鳩の事」に拠るが、表現はかなり変える。

- 15 「●狐と鶴との話（反爾）」 52（A 426）
 仮名草子『伊曾保物語』の下巻第三二話「鶴と狐の事」に拠るが、表現はかなり変える。
- 16 「●雀と人間との話（博愛）」 54（A 627）
 仮名草子『伊曾保物語』の下巻第三一話「鳥人に教化をする事」に拠るが、表現はかなり変える。
- 17 「●瓦盃と驟雨との話（聡淑）」 56（Aesopica）にはない。仮名草子『伊曾保物語』の下巻第二七話「かはらけ慢気をおこす事」
 仮名草子『伊曾保物語』に拠るが、表現はかなり変える。
- 瘦々亭骨皮道人『面白叢談』（明治二四年一月）
 東京の出版社共隆舎刊。笑話の類を集めて一冊に仕立てる。「ます」を用いた口語体。一話がイソップに由来する。
- 瘦々亭骨皮道人（一八六一〜一九一三）は松山出身の小説家。本名西森武城。笑話の類や狂詩、狂句を多く発表する。
- 「◎子供衆のお耳を拝借」 154（A 226）
 これは前述の木原季四郎『子供のをしへ』の「虱と蚤の駆ッ競」とほとんど同文。
- 佐藤治郎吉『少年書類新伊蘇普物語』（明治二五年三月）
 東京の博文館刊。文語体。佐藤は『少年宝庫日本男児』（東京堂、明治二四年）といった本も出している。

「新伊蘇普」と称したのは新たに創作したイソップ風の動物寓話の意味である。従ってイソップ寓話そのものはないはずであるが、次の一話はイソップに依拠している。

「(六六) 報恩は負債の償還なり」(A 235) (絵)

鎌田淵海『少年仏教修身はなし』(明治二五年三月)

京都の顕道書院刊。口語混じりの文語体。「鎌田淵海口演 顕道居士筆記」とある。鎌田は浄土真宗の僧侶と思われる。仏教関係の著書が多数ある。「顕道居士」は「編輯兼発行者」として名が奥付にある松田甚左右衛門であろう。初版は漢字平仮名表記本であるが、同書院から明治二五年七月に漢字片仮名表記本でも刊行されている。ただしこちらは漢字平仮名本の四三ページ三行目該当部分までで終わっている。

書名にあるとおり、少年向けに寓話で仏教の教説を説く。附録を除いた全二五話の中にイソップに依拠して改変した話が二一例ある。すべて挿絵が付く。ページは漢字平仮名本に従う。

- 1 「鼠會議の話」 1 (A 613) (絵)
- 2 「猫と鼠の話」 4 (A 133) (絵)
- 3 「病める小鼠の話」 7 (A 324) (絵)
- 4 「鷹が猫に欺されたる話」 9 (A 124) (絵)
- 5 「蟹と蟻の話」 12 (A 289) (絵)
- 6 「遷仏会の牛の話」 14 (A 182) (絵)
- 7 「鳥と獣と戦の話」 16 (A 566) (絵)

- 8 「狼と羊の話」 19 (A 160) (絵)
- 9 「蚤と虱の話」 22 (A 226) (絵)
- 10 「蟻と蟬の話」 25 (A 12・373) (絵)
- 11 「蛙と鼠の喧嘩せし話」 28 (A 384) (絵)
- 12 「犬と仏狗の話」 31 (A 91) (絵)
- 13 「権兵衛と鳶の話」 33 (A 194) (絵)
- 14 「眼と足の話」 36 (A 130) (絵)
- 15 「鴉と孔雀の話」 39 (A 472) (絵)
- 16 「狼と野牛の話」 45 (A 372) (絵)
- 17 「病める狸の話」 48 (A 305) (絵)
- 18 「虎と樵夫の話」 50 (A 140) (絵)
- 19 「兎と百姓の話」 52 (A) (絵)
- 20 「猿に留守を頼んだ話」 54 (A 234) (絵)
- 21 「獅と鼠の話」 61 (A 156) (絵)

森下亀太郎『家庭教育日本修身談』(明治二五年四月)

大阪の積善館刊。口語体。森下亀太郎(一八六九〜一九四六)は岡山出身。明治二七年に明治法律学校を卒業し、判事、検事を歴任した後、大阪で弁護士となる。後には衆議院議員にもなる。この書を出版した当時はまだ明治法律学校の学生であった。

本書は吉見経綸関とある。前年の一〇月に交付された教育勅語を冒頭に載せる。一話だけイソップに基づく。

森下の号は「黄薇」と記されている。本書と同じ積善館から明治二四年一二月に刊行された『家庭教育小学修身はなし』『家庭教育幼年修身はなし』の著者、渡辺松

茂の号も「黄薇」である。ほぼ同時期に同じ出版社から出た同種の図書の著者の号が一致するのは偶然とは思われないが、森下と渡辺の關係は詳らかにできない。なお、渡辺の二著は事実上イソップ寓話集なので、この小論の対象とはならない。

「●蚤と虱」44 (A 226)

秋元政『教育幼稚の宝』(明治二五年五月)

東京の金桜堂刊。秋元は発行者としても名が載っているから、金桜堂は秋元の創設した出版社と思われる。「ます」を使った口語体。秋元については不明。

『教育幼稚の宝』は「新教育演説」など一八の題目から成り、個別にページ付けがされている。それぞれに序文があり、記された年月は明治二三年四月から明治二五年四月に亘る。これらの事実から推すと、個別に出版された一八種の本を『教育幼稚の宝』の名で合冊して刊行し直したものであろう。各題目は全二一話から成る。各話は見開き右ページに納まっており、左ページに挿絵が付く。いくつかの題目にはイソップ由来の話が含まれている。以下題目の後に括弧で記したのは序文の年月である。

「新教育演説」(明治二三年一月)

1 「○石物言ふ世の中」16 (A 207) (絵)

絵はあるが、内容とは無関係。

2 「○力の及ぶ所に非らずして為すは愚なり」34 (A

135) (絵)

絵はあるが、内容とは無関係。

3 「○我れ人に善を為せば人亦我れに善を為す」40 (A 235) (絵)

4 「○人の風を見て我が体を直せ」44 (A 347) (絵)

5 「○知らざるは知らずとせよ」46 (A 203) (絵)

「滑稽子供演説」(明治二五年四月)

6 「○蚤と虱の駈ツ競」28 (A 226) (絵)

「少年必携子供伊蘇普」(明治二五年四月)

7 「○月の衣服奇談」40 (A 468) (絵)

8 「○立樹の怨言」42 (A 302) (絵)

「少年教育博物はなし」(明治二三年)

9 「○鶏の金言」10 (A 503) (絵)

10 「○誰れが阿呆鴉と云ふや」14 (A 490) (絵)

11 「○日輪と風の力比べ」16 (A 46) (絵)

12 「○獅子の真似をする驢馬の話」18 (A 188) (絵)

13 「○偽飾は剥げる赤禿頭の髭の話」20 (A 375) (絵)

14 「○不用に見えても不用ならぬ樹牆の話」(Aesopica にはなし。James 本の 161 The Hedge and the Vineyard と同話) (絵)

15 「○處飾(ママ)よりは実用を取れ鹿の話」24 (A 74) (絵)

「處飾」は「虚飾」の誤植。

16 「○我身を捻て人の痛さを知る獅子の話」26 (A 414) (絵)

17 「○孔雀と鶴の着物争ひ」28 (A 294) (絵)

18 「○影を掴みて実を失ふ犬の譬話」 34 (A 133) (絵)
19 「○蔭で威張者は本場に臆す狩人の話」 42 (A 326) (絵)

「少年必携教育幻灯会」 (明治三十三年一〇月)

20 「○孔雀の真似をする鴉の譬話」 10 (A 472) (絵)
21 「○証拠は口なくして有体を陳ず」 20 (A 280) (絵)
22 「○恩知らずの末路」 28 (A 77) (絵)
23 「○交り深過ぎて不礼を為すこと勿れ」 32 (A 10) (絵)

24 「○急ぐ事は静かにす可し」 34 (A 201) (絵)

25 「○兎輩よ悪遊をすること勿れ」 40 (Asopica) はない。James 本の 172 The Boys and the Frogs と同

話) (絵)

26 「○鳥刺と山鳥の戒め話」 44 (A 265) (絵)

「小学生徒少年俱樂部」 (明治二十四年六月)

27 「○昔話鼠の歎息」 24 (A 24) (絵)

「少年教育智恵かぐみ」 (明治三十三年一〇月)

28 「○狐の點智」 44 (A 124) (絵)

29 「○鴉の頓方 (ママ) 瓶の水量を増すの話」 46 (A 390) (絵)

「少年必携教育一口話」 (明治三十五年四月)

30 「○手前勝手多き世の中」 44 (A 67) (絵)

堀三友・秋野繁吉『伊蘇普実伝』 (明治三十三年二月)

本書は明治三十二年二月に東京の救済新報社から、同年一二月に東京の文学同志会から出版されるが、版は同一

である。ただし新報社版は序文が松村介石、五十嵐喜広、堀三友の順だが、文学同志会版は五十嵐、堀、松村の順。文学同志会版の表紙はあろうことか「伊蘇普戯伝」となっている。「伊蘇普実伝」に続いて「仏蘭西ヴォルテール氏原著」を「羽陽散士」が翻訳した「曼能」が合綴されている。「羽陽散士」については何の説明もないが、「羽陽」即ち山形の出身である堀であろう。

内題に「法学士 故堀三友／帝国大学生 秋野繁吉 共編」とある。文学同志会版の表紙に「法学博士 堀三友／帝国大学 秋野繁吉」とある。堀が生前法学博士号を得ていたのならば、内題にも「博士」を謳うはずであろうから、実際に博士号を得ていたのか疑問が残る。堀には法学関係の著書、訳書がある。

本書の成り立ちは堀三友と五十嵐喜広の序文に詳しいので、これを引用する。五十嵐は、奥付に「発行者」として名が挙がっているから、救済新報社の代表者である。

【堀三友の序文】

伊蘇普ハ。蘇玖拉的。亜利斯底的。孔丘。黄老輩ト比肩足適ス可キ古ノ聖人ナリ。蓋シ氏ノ聖智ハ生命ト共ニ之ヲ天ニ稟ケ教化伝修ヲ俟タズシテ自然ニ完成セルモノナリ。故ニ其物ニ接シテ活動スルヤ。迸発即応恰モ影ノ形ニ從ヒ響ノ声ニ応スルカ如ク毫毛礙滞スルコトナキナリ。氏ハ之ヲ以テ紛ヲ解キ。難ヲ救ヒ。身ヲ護シ。人ヲ助ケ。国ヲ保チ。世ヲ濟フ。其功績モ亦偉ナリト謂フ可シ矣。且ツ氏ハ頑愚蒙昧ノ世ニ生レ。其道理ヲ以テ悟シ難キヤ。則チ犬猫虎豹獅子狼等ノ実物ヲ藉リ。仮ヲ以テ真ヲ説キ譬喩ヲ以テ道ヲ談ズ。其言卑近ト雖トモ其旨深遠

ナリ。所謂伊蘇普物語ノ如キ其書各国ニ行ハレ。皆以テ兒童修身ノ教科ニ引用セリ故ニ伊蘇普ノ名ヲ称スル。三尺ノ兒童尚能ク之ヲ記ス而シテ独リ怪シム。其伝記実履ニ至テハ大人学士尚之ヲ知ル者希ナリ。是豈ニ史伝ノ欠漏ニ原因セサルヲ得ンヤ。乙未(ママ)ノ歳余病ニ臥シ会仏人賦恩底奴氏ノ詩集ヲ閱ス。其書伊蘇普ノ伝紀ヲ掲ク。固ヨリ略伝ニ属スト雖トモ。亦以テ伊氏一代ノ言働ヲ概知スルニ足ル。而シテ紛難ニ際シ其頓才英智ノ煥発スル所ニ至テハ不覚快哉ヲ呼ビ。万床の鬱悶ヲ忘ル、コト屢々ナリ余甚タ之ヲ愛読ス。郷人秋野君文才アリ。余ノ病ニ罹リシヨリ日夕待坐病ヲ看ル。余依テ病苦ノ暇。原書ヲ執テ臥ナカラ漸ク全編ヲ卒フ。君乃チ之ヲ一卷ノ書冊ニ編シ。題シテ伊蘇普実伝ト云フ。曰ク此書以テ史伝ノ欠漏ヲ弥縫シ。彼ノ名ヲ知テ実ヲ知ラザル者ノ参考ト為ス可シ。病ムト雖トモ。強テ一片ノ言ヲ叙セヨト余笑テ之ヲ諾シ乃チ此序文ヲ作ル。

明治廿八年乙未九月

堀 三 友識

【五十嵐喜広の序文】

頃日、畏友秋野繁吉君、一書を携へ来り、嗟咽余に告げて曰く、此書元と余及親友故堀三友氏が病苦の間を忍んで相共に編せしもの、稿成りて將に梓に上せんとするに当り、氏は端なくも病革りて、實を他界に易へぬと、余之を聞て同情の涙に咽びつゝ、取つて披見せは、これなん、余が多年座右の愛読書たる、イソップ物語の著者イソップの伝記なり、読み来り読み去りて転た千歳の下知己相見の感胸臆に溢る、即ち君に勧むるに速に之を世に公にせんことを以てすれば君も亦た直に快諾

して、上梓の業を余に托し且つ余の不肖に強ゆるに校閲の事を以てせらる余の不学不文何んぞ著者の意を満すを得ん。

思ふに今や邦家多事多端、教育、政治、文学、工業、宗教、慈善、等百般の事業、大に勃興して東洋文明の枢機は、専ら僅かに三千里方たる吾孤島帝国の双肩に繋れり是れ宜しく正に、胸中清涼洒落、一介の塵埃を留めず識見、活卓々、洞破層雲の上に及び深淵の底に徹し機鋒、縦横円転、游刃物碍を劈解する底の、偉人物輩出せんことを、渴望すべき秋にあらずや、此書若し世に一出して、之等の要求に對し、世道人心を開拓するに於て聊か補益する所あらば、余及著者の共に、幸榮とする所元より論勿きのみならず、故堀三友君も亦た其れ天上一層の安慰を増すを得ん乎。

明治卅二年一月

濃飛育兒院東京支部にて

五十嵐 喜 広

堀は「乙未(乙未)ノ歳」明治二八年に、「仏人賦恩底奴氏ノ詩集」の「伊蘇普ノ伝紀」、つまりラ・フォンテーヌの『寓話』中の「フィリギアの人イソップの生涯」を翻訳した。「全編ヲ卒フ」とあるから、事実上訳文は堀一人の仕事であろう。病臥にあつた堀に代わつて友人秋野が奔走した結果、五十嵐の協力を得て出版にこぎ着けた。序文まで用意しながら出版まで三年余がかかり、不幸にも堀は他界してしまつたという経緯がわかる。本文は文語体。伝記の中に普通はイソップ寓話とされる次の二話が繰り込まれている。

1「伊蘇普の所行クサンチユス夫人を離縁せしむ」12(A

719)

2 「サモース人伊蘇普を以て困難に換ふ」 26 (A 153)

坪内雄蔵『文学叢書 英詩文評釈』(明治三十五年六月)
坪内雄蔵『英文評釈』(明治二六・二七年頃か)

『文学叢書 英詩文評釈』は坪内雄蔵(逍遙)(一八五九〜一九三五)が早稲田大学で行った講義をまとめたもの。早稲田大学出版部刊。その八、九年前に刊行された『英文評釈』(東京専門学校出版部)の改訂版である。その両書に「訓法手引」の例として、以下のイソップ寓話が挙げられる。

The Bundle of Sticks 15 (A 53)

原文を一センテンスずつに分解し、訳法を解説したものである。分解された英文を復元すると以下のとおりとなる。これは James 本、Townsend 本、Stickney 本とも異なり、原書が何かは不明である。

The Bundle of Sticks.

A father had seven sons who were always quarreling with one another. As this distressed the father very much, he one day desired all of them to come to his chamber. He there laid before them seven sticks which were fastened together. "Now", said he, "I will give a hundred crowns to that one of you who can break this bundle of sticks asunder." Each of them tried to the utmost of his strength, and each was obliged to confess that he could not break it. "And yet" said the

father. "there is no difficulty about it. He then united the bundle, and broke one stick after the other with the greatest ease. As long as you hold together, you are a match for all your enemies; but if you quarrel and separate, it will happen to you as to these sticks which you see lying broken on the ground.

東基吉『家庭童話母のみやげ』(明治三十八年一〇月)

東京の同文館刊。「です」「ます」を用いた口語体。

東基吉(一八七二〜一九五八)は当時東京女子師範学校教授で、幼児教育の権威者。「可愛きお子様へのみやげ話の料にも」とこの書物をお母さま方へ進呈いたします明治三十八年十月著者」との序文が付いている。母親が子どもに読み聞かせることを想定したものである。多くの創作童話を載せた後に「いそつぷの話」と題して以下の一〇話を載せる。またそれとは別に唱歌「兎と亀」を載せる。

東が中心となって発行した幼児教育・婦人教育の月刊誌『婦人と子ども』にも百近いイソップ寓話が掲載されている^{注3}。その本文を比べると、五話はほぼ同文である。

「いそつぷの話」

- 1 「其一 蛙と牝牛」(A 376)(絵)
- 2 「其二 樫の木と薄」(A 70)
- 3 「其三 獅子と鼠」(A 150)
- 4 「其四 兎と亀」(A 226)

5 「其五 狼と鶴」(A 156) (絵)

『婦人と子ども』第三卷第三号 (明治三六年三月)
の「狼と鶴」とほぼ同文。

6 「其六 父と子ども」(A 53)

『婦人と子ども』第三卷第三号 (明治三六年三月)
の「父と子ども」とほぼ同文。

7 「其七 驢馬と狐と獅子と」(A 191)

『婦人と子ども』第三卷第六号 (明治三六年六月)
の「驢馬と狐と獅子と」とほぼ同文。

8 「其八 牝獅子」(A 257)

『婦人と子ども』第三卷第六号 (明治三六年六月)
の「牝獅子」とほぼ同文。

9 「其九 犬と影」(A 133) (絵)

『婦人と子ども』第三卷第五号 (明治三六年五月)
の「犬と影」とほぼ同文。

10 「其十 鼠の相談」(A 613) (絵)

唱歌
11 「兎と亀」(A 226)

東基吉作歌、鈴木毅一作曲の唱歌で、五線譜付きである。鈴木(一八七七—一九二六)は滝廉太郎の東京音楽学校時代の親友として知られる。現在でも歌われる「もしもしかめよ」で始まる石原和三郎作歌・納所弁次郎作曲の「うさぎとかめ」はこの四年前の明治三四年には作られている。東の作歌を引用しておこう。

「兎」足のみじかい亀の子を／日本一ののろまよと／ゆだ

んをしたので後れたり／こんなに口惜しい事はない
「亀」わたしのようなのろまでも／せつせとゆけばこのほり／走るにはやい兎さん／負かしてやるに訳はない

東基吉『教育童話子供楽園』(明治四〇年四月)

『家庭童話母のみやげ』の続篇。同じく東京の同文館刊。「修身の例話めかないことに注意した」(「はしがき」と言い、修身書とは一線を画す。創作童話の後に「いそつぷの話」一〇話を載せる。「です」「ます」を用いた口語体。

東が中心となった月刊誌『婦人と子ども』に掲載されたイソップ寓話の本文と比べると、文章は異なる。

「いそつぷの話」

1 「其一 鼠と蛙と鳶」(A 384) (絵)

2 「其二 鳥と狐」(A 124) (絵)

3 「其三 蟻と鳩」(A 235)

4 「其四 狐と鶴」(A 426) (絵)

5 「其五 友達と熊」(A 65)

6 「其六 人と馬」(A 180)

7 「其七 狼と獅子」(A 260)

8 「其八 金の卵」(A 58)

9 「其九 犬と兎」(A 331) (絵)

10 「其十 鳥と獣と蝙蝠」(A 566)

「少年お伽噺」シリーズ附録「幼年お伽噺」

明治四〇年頃から東京の武田博盛堂が「少年お伽噺」

と題したシリーズ物を刊行している。各冊ほとんどが四二ページの小冊子である。少なくとも第四〇編まで出されている。多くは歴史上の人物にまつわる教訓話であるが、各冊には、本編一話の後に「幼年お伽噺」と称した附録一話が付いている。この附録がしばしばイソップ寓話の翻案となっている。附録は本編よりも低い年齢層を読者対象としている。全て挿絵が付いている。本編「春日局」に対し、附録「鼠の相談」(猫に鈴を付ける相談の話)を配するように、両方の話に関連性はない。「ます」を用いた口語体。

筆者が見ることができたのは第一〇二・二九・三〇・三三〇三五・三八〇四〇編の計三〇編であり、他は所在不明のため実見していない。そのうちイソップの翻案は第一〇六・一一・一三〇一八・二〇〇二二編の計一六編に見られる。記した刊行年月は初版とは限らないので注意していただきたい。多くは伊藤小翠の文、笠井鳳斎の絵から成る。伊藤については本シリーズ以外の事跡は不明。笠井の生没年は不明だが、昭和初期まで絵筆を執っている。

なお、本シリーズの後も、後述する「明治少年お伽噺」「絵入日本お伽噺」といった「お伽噺」をタイトルに含むシリーズ物が刊行されている。これらには今日なら「お伽話」とは呼び難い歴史上の逸話が多く入っている。当時は幼児や少年少女向けの短い読み物を「お伽噺」と称していたようだ。

1 第一編『山賊退治』(明治四二年一月第一〇版) 附録

「金の斧」(A 73) 伊藤小翠編、笠井鳳斎画。

2 第二編『春日局』(明治四三年一月) 附録

「鼠の相談」(A 613) 伊藤小翠編、笠井鳳斎画。

3 第三編『曾呂利新左衛門』(明治四〇年九月) 附録

「鴉と鶴」(A 398) 伊藤小翠編、笠井鳳斎画。

4 第四編『少年武者修行』(明治四〇年十二月) 附録

「鼠のお客」(A 352) 伊藤小翠編、笠井鳳斎画。

5 第五編『狸のお使』(明治四一年七月) 附録

「兎馬」(A 181) 伊藤小翠編、笠井鳳斎画。

6 第六編『水戸黄門』(明治四一年一月) 附録

7 「嘘つき太郎」(A 210) 伊藤小翠編、笠井鳳斎画。

7 第一編『忠義の政岡』(明治四二年一月) 附録

「蛙の天罰」(表紙には「蛙の相談」) (A 44)

伊藤小翠著、三宅花塘画。

8 第一三編『悪魔退治』(明治四一年二月) 附録

「獅子王」(A 156) 教堂散史著、笠井鳳斎(ママ)画。

9 第一四編『怠惰太郎』(明治四三年一月) 附録

「鹿の高慢」(A 74) 教堂小史著、笠井鳳斎画。

10 第一五編『袈裟御前』(明治四一年二月) 附録

「金の卵」(A 87) 伊藤小翠編、笠井鳳斎画。

11 第一六編『巴御前』(明治四一年七月) 附録

「寝ぼ助兎」(A 226) 伊藤小翠著、笠井鳳斎画。

12 第一七編『木村重成』(明治四三年一月) 附録

「孔雀の偽物」(A 472) 伊藤小翠著、笠井鳳斎画。

13 第一八編『狼退治』(明治四一年七月) 附録

「大食狐」(A 24) 伊藤小翠編、笠井鳳斎画。

14第二〇編『和氣清磨』(明治四一年七月) 附録

「欲張犬」(A 133) 伊藤小翠編、笠井鳳齋画。

15第二一編『お猿の兵隊』(明治四一年七月) 附録

「狐の御馳走」(A 426) 伊藤小翠編、笠井鳳齋画。

16第二二編『天人娘』(明治四一年七月) 附録

「獅子の聳入」(A 140) 伊藤小翠編、笠井鳳齋画。

「明治少年お伽噺」シリーズ

東京の島鮮堂から出された少年少女向け読み物のシリーズ。中川柳涯編、稲垣蝸堂(静斎)画。各編一話で、第三六編まで刊行されている。中川には歴史読物や実用的な文章作法の著作がある。また『ポケット伊蘇普物語』(日吉堂、明治四三年一〇月)というイソップ寓話集も編んでいる。稲垣は少年向け図書の挿絵を多く描いている。

このシリーズの特徴は各編冒頭に唱歌が付いていることである。唱歌は皆、七五七七五七七五を一連とし、五連で構成されている。「唱歌」というからには、歌われることを前提にしていたのであろうが、音譜はない。七五の四句繰り返しの歌は当時既に「港」(「空も港も夜は晴れて……」明治二九年にはある)「汽笛一声」(「汽笛一声新橋を……」明治三三年初出)「うさぎとかめ」(「もしもしかめよ、かめさんよ……」明治三四年)などがあるので、これら既存のメロディーで歌うことを想定しているのかとも想像される。

筆者が実際に見たのは第四・六・八・一〇・一二編の

みである。他は所在不明のため未見。そのうち第四・六・八・一一編はイソップ寓話。未見の編では第三編「猫と鼠」、第四編「獅子と羊飼」が、タイトルから推測すると、イソップ寓話の可能性はある。他は「赤穂義士」「牛若丸」など多く歴史物である。本編は「ます」を用いた口語体。

唱歌は本編の話の要約になっているので、引用しておく。

1第四編『狼と狐』(明治四二年一月)(A 258)(絵)

狼と狐の歌

ある山奥のその奥に／獅子の病を見舞はんと／犬・猿・兎・

狼や／熊も参りて看護する。

中に狐は一度も／姿を見せず何処へか／隠れて来ぬに一

同は／不思議な事と思ひけり。

常から不仲の狼は／時こそ来れと大王に／狐の悪戯並べ

立て／したり顔して告にける。

大王聞いて腹を立て／折柄出で来た狐をば／捕へて叱れば

大王の／薬を掘りに行たと云ふ。

大王声を和らげて／薬を問へば 狼の／肝ぞと云ふに 狼

は／其の場に裂かれて死にけり。

初春の風の音をききつ

りうがい生

2第六編『旅人と熊』(明治四二年一月)(A 65)(絵)

旅人と熊の歌

一度友に救はれて／嬉さ譬へんよしもなく／君に危難のあ

るならば／生命も要じと誓ひけり。

さらばこれより連れ立ちて／旅行をば為んと行く森の／中に
てあはれ大熊の喰はんとするに出逢けり。
助けられたる一人は／早くも熊を見付け出し／物をも云は
ず木に攀り／恩ある友を捨てにけり。
後れし友は熊を見て／逃る間なければ死を粧ひ／顔腹手足
を嗅がれしが／漸く危難を免れけり。
逃げたる友は木を降りて／何をか熊が云ひたると／問へば危
難を知らせざる／友をば持つなど云ひきとぞ。

3 第八編『孔雀の願ひ』（明治四二年二月）（A 294）（絵）

孔雀の願ひの歌

色さまさまの彩色に／世に類なき羽翼有ちし／孔雀ぞ鳥
の王なりと／心竊かに思ひけり。
ある日鶴に逢ひし時／おのれが羽を打ち抜け／誇りて鶴の色
なきを／口を極めて蔑如けり。
鶴は怒らず微笑みて／何を誇るぞよしや身に／五色の翼あ
るとても／空翔ぶことは能ふまじ。
地に這ふ虫を漁りつつ／歌ひも得せぬ下鳥より／星まで届
く声を有ち／自由に翔るが尊きぞ。
孔雀は聞きて愛神に／声と翼を願ひしが／足を知れよ
と諭されて／今も翼を誇るなり

4 第二一編『蝙蝠の天罰』（明治四二年二月）（A 172）

566（絵）

本編はイソップの二話を組み合わせて一話とする。

蝙蝠の天罰の歌

翅あれども鳥ならず／姿は鼠に似たれども／鼠の仲間
に入れられず／あはれ不思議な蝙蝠よ。
一年鳥と獸らが／戦ひなせし其の時に／戦争の様子を見
定めて／彼方此方と迷ひしが。
戦ひ敗みし其のあとで／二つの蝙蝠は／昼は出るなど夜
よりは／出られぬ身とは成に覺。
鳥にもあらぬ蝙蝠が／鳥の真似せし酬ひにて／一生逆に
身を吊るし／休めぬ身とは成にけり。
世の人びとも其の通り／これと定まる心なく／迷はば到底
信用を／人より受ることならず。

りうがい生

「絵入日本お伽噺」シリーズ附録「少年教育お伽噺」

東京の島鮮堂から出された少年向け読み物のシリ
ズ。正確な数は不明だが一五〇編以上続いている。広告
の文章がこのシリーズの性格を表しているのので、次に引
用しておく。
少年少女諸君ハ此日本お伽噺ヲ第一編ヨリ一冊ツツ買テオ
読ミニ成ルト普通修身教育ナルノ滑稽三才オ笑ヒニナルノ
ト日本ノ歴史ガ自然ニオワカリニ成リ升ソウシテ待屈ノ時ニハ
何ノオ新デモ出来升是非買テ揃ヘテオ置キナサル様御勸メ
イタシ升

各編、本編一話と「少年教育お伽噺」という附録一話
からなる。本編はほとんどが歴史上の逸話であるのに対
し附録は昔話や童話である。全て挿絵が付いている。こ
の附録にイソップ寓話がいくつか採用されている。本編

と附録に内容上の関連性は認められない。文体は口語体。筆者は第一・三・一六・一八・三二・四〇・四七・四八・五二・五四・五七・六一・六二・六八・七二・七五・八一・八四・九〇・九三・九五・一一七・一一八・一二六・一三五・一五〇編を実見(複写を含む)している。それ以外は所在不明。そのうち第一・三・一六・一八・二七・三二・四七・四八・五七・六一・六二・六八・八一・八四・九五・一三五編がイソップ寓話である。第一・三・一六・一八・一三五編では二話を組み合わせて一話とする工夫が見られる。

記した刊行年月は、筆者が見た版のもので、初版とは限らない。9第五七編は「大正」となっているが、編次から推して、初版は明治期と思われる。

1 第一編『鎮西八郎為朝』(明治四三年三月) 附録

中川柳涯編・山本佳年画「宝の所在」(表紙)、「百姓と息子」(内題) (A 42・285)

2 第三編『毛谷村六助』(明治四三年三月) 附録

中川柳涯編・山本佳年画「狼の後悔」(A 156・260)

3 第一六編『楠正行』(明治四三年三月) 附録

青葉山人述・笠井鳳斎画「鳥の智慧」(A 390・490)

4 第一八編『曾我兄弟』(明治四二年七月) 附録

中川柳涯編・笠井鳳斎画「猫と鼠」(A 140・613)

5 第二七編『五郎正宗』(明治四二年一月) 附録

中川柳涯編・笠井鳳斎画「軍人と馬」(A 320)

6 第三二編『忠僕直助』(明治四三年四月) 附録

中川柳涯編・笠井鳳斎画「犬の旅」(A 135)

7 第四七編『菅原道真』(明治四三年三月) 附録

青葉山人編・笠井鳳斎画「二個の瓶」(A 378)

8 第四八編『中将姫』(明治四二年一月) 附録

青葉山人編・笠井鳳斎画「兎と蛙」(A 138)

9 第五七編『荒木又右衛門』(大正七年) 附録

青葉山人編・笠井鳳斎画「獅子と兎」(A 148)

10 第六一編『武雄兄弟島廻り』(明治四三年五月) 附録

青葉山人編・笠井鳳斎画「自分の役目」(A 476)

11 第六二編『高山彦九郎』(明治四四年四月) 附録

青葉山人編・笠井鳳斎画「賢い洗濯屋」(A 29)

12 第六八編『常盤御前』(明治四三年九月) 附録

青葉山人編・笠井鳳斎画「狐と仮面」(A 27)

13 第八一編『熊本籠城』(明治四四年四月) 附録

青葉山人編・笠井鳳斎画「夢中の衣装」(Aesopica

にはない。James 本の 104 The County Maid and her

Milk-Cat と同話)

14 第八四編『黒百合姫』(明治四四年一月) 附録

青葉山人述・笠井鳳斎画「乗馬と驢馬」(A 357・565)

15 第九五編『金言姫』(明治四四年一月) 附録

青葉山人述・笠井鳳斎画「老人の愚痴」(A 60)

16 第一三五編『酒井の太鼓』(明治四四年六月) 附録

中川柳涯編・山本佳年画「商人と驢馬」(A 179・180)

次の二例は明らかに大正期の刊行なのでこの稿の対象にはならないが、参考までに付け加えておく。

編次不明『捨られた子』(大正三年) 附録

青葉山人編・笠井鳳斎画「蛙の移住」(A 43)

編次不明『母のみとり』（大正七年）附録
青葉山人編・笠井鳳斎画「母蟹と児蟹」（A 322）

小蝶山人『少年お伽演説』（明治四三年六月）

東京の岡村書店刊。表紙に「小蝶山人編」とあり、奥付に「編輯兼発行者」として「岡村庄兵衛」を挙げているから、小蝶山人とは岡村書店の岡村庄兵衛（一八六〇～一九二三）と思われる。岡村書店は一八九九年頃から少年向けの本を中心に出版活動を行っている出版社。

教訓的な話を集めた修身本の一つだが、演説口調で示すところに特徴がある。その口調は文語体を交えた口語体。総話数一一八のうちイソップ由来と思われる話が七話ある。

- 1 「〇欲深き者を戒む」 23 (A 133)
- 2 「〇獅子と蚊の話」 45 (A 255)
- 3 「〇猫に強き名を付けんとしたる話」 69 (A 619)
- 4 「〇鹿の譬話」 83 (A 74)
- 5 「〇智恵の競争お伽演説開会の趣旨」 115 (A 390)
- 6 「〇他人に対して親切にせよ」 121 (A 150)
- 7 「〇我か務めを怠る者を戒む」 126 (A 181)

馬場直美『お伽百題』（明治四三年一〇月）

東京の岡村書店刊。日本、中国、インド、ヨーロッパ各地から物語を拾い集めてお伽話風に仕立てている。「百題」とあるが実際は一〇一話。「日本昔噺」「英国物語集」「イソップ」などと一つ一つ出自を明示する。以下

のように約半分の五〇弱がイソップ寓話由来。「一九 慣れゝば平気」「四六 愚な鳥刺」「五五 三人の盗賊」の三話は「イソップ」に分類されているが、該当話はイソップ寓話に見当たらない。「二一 桃太郎」を「イソップ」とし、次の「二二 伶俐い雀」を「日本昔噺」とするが、これは明らかに両者を取り違えた誤植である。文体は「です・ます」を用いた口語体。

馬場直美は『新ポケット新訳イソップ物語』（岡村盛花堂、明治四三年一〇月）というイソップの翻訳本を同時期に出版している。両者に共通する話を比べると、本文は異なる。『お伽百題』の方は、例えば「四一 蝦蟇博士」でヒキガエルにドイツ帰りの博士と言わせるなど、改変が目立つ。なお、岡村盛花堂は、事実上岡村書店と同じ出版社。その他馬場には文章作法の本、ヨーロッパの文豪の文を集めた『通俗泰西文芸名作集』（帝国講学会、大正一四年五月）などの著書がある。

1 「四 大欲は無欲」(Aesopica にはない。James 本の 147 The Boy and the Filberts と同話) (絵)

- 2 「五 賢い狐」(A 142) (絵)
- 3 「六 欲張医者」(A 57)
- 4 「八 鶴の仇討」(A 426) (絵)
- 5 「九 懶惰者」(A 112・373)
- 6 「一一 世は憐愍」(A 46)
- 7 「一二 愚な犬」(A 135)
- 8 「一三 愚な犬」(A 342)
- 9 「一四 論より証拠」(A 33)

33	「八一	賢い犬」(A 403)
32	「八〇	守銭奴」(A 225)
31	「七六	欲張老婆」(A 58)
30	「七三	狼! 狼!」(A 210)
29	「七二	天文学者」(A 40)
28	「七〇	不孝の報」(A 678)
27	「六八	「六八—2」 兎と亀」(A 226)
26	「六七	敗けるは勝」(A 70)
25	「六三	鼠の国会」(A 613)
24	「六二	熊の叫」(A 65)
23	「六一	兎漢」(A 32)
22	「五二	羊の失敗」(A 188)
21	「五一	蝦蟆博士」(A 289)
20	「四一	愚な驢馬」(A 91)
19	「三四	大敵小敵」(A 255)
18	「三一	恩知らずの人」(A 175)
17	「三〇	欲深犬」(A 133)
16	「二七	伊蘇普の話」(イソップ伝)
15	「二六	馬鹿な鳥」(A 124)
14	「二二	空威張」(A 201)
13	「二一	性急な鳩」(A 60)
12	「二〇	閻魔の使」(A 60)
11	「一九	性急な鳩」(A 201)
10	「一八	空威張」(A 201)
9	「一七	性急な鳩」(A 60)
8	「一六	閻魔の使」(A 60)
7	「一五	閻魔の使」(A 60)
6	「一四	閻魔の使」(A 60)
5	「一三	閻魔の使」(A 60)
4	「一二	閻魔の使」(A 60)
3	「一一	閻魔の使」(A 60)
2	「一〇	閻魔の使」(A 60)
1	「〇九	閻魔の使」(A 60)

目次はこれを欠くので、番号が付されていない。仮に

「六八—2」とする。

34	「八二	隻眼の鹿」(A 75)
33	「八四	蟹の母子」(A 322)
32	「八七	狸々大王」(A 569)
31	「八八	蠟燭の犬言」(A 349)
30	「八九	犬と料理人」(目次には「九九」とあるが誤り)(A 228)(絵)
29	「九〇	狐と猿」(A 81)
28	「九二	獅子と鼠」(A 150)
27	「九三	木と斧」(Aesopica にはない。James 本の 59The Trees and the Axe 同話)
26	「九四	兎と蛙」(A 138)
25	「九五	畑の宝」(A 42)
24	「九六	狡猾い蝙蝠」(A 566)(絵)
23	「九七	商人と驢馬」(A 180)
22	「九九	欲張獅子の失敗」(A 148)
21	「一〇〇	愚な狐」(A 252)
20	「一〇一	愚な狐」(A 252)
19	「一〇二	愚な狐」(A 252)
18	「一〇三	愚な狐」(A 252)
17	「一〇四	愚な狐」(A 252)
16	「一〇五	愚な狐」(A 252)
15	「一〇六	愚な狐」(A 252)
14	「一〇七	愚な狐」(A 252)
13	「一〇八	愚な狐」(A 252)
12	「一〇九	愚な狐」(A 252)
11	「一一〇	愚な狐」(A 252)
10	「一一一	愚な狐」(A 252)
9	「一一二	愚な狐」(A 252)
8	「一一三	愚な狐」(A 252)
7	「一一四	愚な狐」(A 252)
6	「一一五	愚な狐」(A 252)
5	「一一六	愚な狐」(A 252)
4	「一一七	愚な狐」(A 252)
3	「一一八	愚な狐」(A 252)
2	「一一九	愚な狐」(A 252)
1	「一二〇	愚な狐」(A 252)

次の一話がイソップ寓話の改作である。

「第十七番 惡戯小僧」(A 210)

鈴木源四郎『少年教育修身はなし 動物の巻』(明治四四年三月)

東京の大川屋書店刊。冒頭に「勅諭」即ち教育勅語を置き、続いて92「熊と旅人の話」の挿絵を載せる。これ以外に挿絵はない。鈴木源四郎は日本史に題材を採った少年向けの図書を多く書いている。それ以外は不明。

副題に「動物の巻」とあり、動物寓話集であるが、「附録」に動物の登場しない話を載せる。これにもイソップ由来の話が一話ある。これを含め百以上のイソップ寓話を収める。そして収載話の殆どがイソップ寓話でもあるので、イソップ寓話集に分類してもよさそうである。しかし「山内一豊駿馬を買ふ話」「晋の車胤勉学の話」など、数少ないが日本、中国の逸話もあるので、一般の寓話集等と見なし、本稿の対象とした。

複数の文献を原拠としているので、話によつて文語体あり口語体ありと、統一性がない。その依拠した文献について詳細な調査はしていないが、気づいた範囲でいうと、前述の小池清『通俗修身談』(或いは同内容の西村寅二郎の二書)からタイトル、本文もそのままに一二話を採る。載せる順も小池(或いは西村)のに合致する。

鈴木は「文廼屋主人」とも称する。西村寅二郎も「文廼屋主人」を称している。これが偶然の一致なのか、両者は同一人物なのか、何らかの関係があるのか、現在のと

ころは不明である。

また渡部温『通俗伊蘇普物語』に依拠したと推定されるのが七十余話ある。『通俗伊蘇普物語』には初版(明治六年)、再版(明治八年)、改正増補版(明治二十一年)があるが、初版に拠っていることが、22「鳶と狼の話」でわかる。これは「仔羊と狼の話」とすべきものであり、事実渡部の再版、改正増補版ではそうなっている。ところが初版では渡部は^をを^をと誤読し「鳶」と誤訳してしまったものであり、鈴木はそれをそのまま引き継いでいる。

要するに先行の寓話集類からの寄せ集めに近い作りであり、オリジナリティーは感じられない。7「鳶と鴉の話」と64「鳶と鳥の話」、12「雀と人間との話」と59「雀と教解の話」は本文は異なるが同話である。これは、あれこれの文献から選んだ際に、同じ寓話と気づかず採用してしまったものと思われる。このように、編集に余り周到さが見られない。

1 ● 蟻と蠅との話 4 (A 112・373)

『通俗修身談』の「蟻と蠅との話」と同文。

2 ● 馬と馬丁との話 7 (A 319)

『通俗修身談』の「馬と馬丁との話」と同文。

3 ● 蝙蝠と鼯との話 17 (A 172)

『通俗修身談』の「蝙蝠と鼯との話」と同文。

4 ● 蜂と蟋蟀との話 27 (A 112・373)

『通俗修身談』の「蜂と蟋蟀との話」と同文。

5 ● 狐と鶏との話 31 (A 671)

- 22 「●弓にて射られたる鷲の話」 59 (A 276)
- 21 「●獅子と羊の話」 58 (A 514)
- 20 「●狐と山羊の話」 57 (A 9)
- 19 「●狼と羊の話」 56 (A 160)
- 18 「●盗賊と犬の話」 56 (A 403)
- 17 「●弥陀如来の木像を載せたる馬の話」 55 (A 182)
- 16 「●狼と鶴の話」 53 (A 156)
- 15 「●兎と亀の話」 52 (A 226)
- 14 「●犬が牛肉を窃みたる話」 51 (A 133)
- 13 「●雀と人間との話」 48 (A 627)
- 12 「●通俗修身談」の「狐と鶴との話」と同文。
- 11 「●通俗修身談」の「鼠の集会」と同文。
- 10 「●通俗修身談」の「狼と羊との話」と同文。
- 9 「●通俗修身談」の「鷲と鴉との話」と同文。
- 8 「●通俗修身談」の「鷲と鴉との話」と同文。
- 7 「●通俗修身談」の「蠅と蟻との話」と同文。
- 6 「●通俗修身談」の「猿と犬との話」と同文。
- 5 「●通俗修身談」の「狐と鶏との話」と同文。

- 23 「●呆鴉の話」 60 (A 472)
- 24 「●通俗伊蘇普物語」の「第四 呆鴉の話」に拠る。
- 25 「●通俗伊蘇普物語」初版の「第八 鷲と狼の話」に拠る。これにより、初版に依拠していることがわかる。
- 26 「●通俗伊蘇普物語」の「第十一 狐と獅子の話」に拠る。
- 27 「●通俗伊蘇普物語」の「第十四 田舎漢と蛇の話」に拠る。
- 28 「●通俗伊蘇普物語」の「第二十二 熊と狐の話」に拠る。
- 29 「●通俗伊蘇普物語」の「第四十六 驢馬と狒狗の話」に拠る。
- 30 「●通俗伊蘇普物語」の「第四十七 狼と羊の話」に拠る。
- 31 「●通俗伊蘇普物語」の「第四十九 歳徳神と駱駝の話」に拠る。

32 「● 兎と蛙の話」 66 (A 138)

『通俗伊蘇普物語』の「第五十二 兎と蛙の話」に拠る。

33 「● 農夫と鶴の話」 67 (A 194)

『通俗伊蘇普物語』の「第五十三 農夫と鶴の話」に拠る。

34 「● 猿と駱駝の話」 68 (A 83)

『通俗伊蘇普物語』の「第五十五 猿と駱駝の話」に拠る。

35 「● 鳶と狐の話」 69 (A 124)

「● 烏と扁嘴鴉の話」 70 (A 125)

37 「● 二足の蛙住移の話」 71 (A 43)

『通俗伊蘇普物語』の「二足の蛙住移の話」に拠る。

38 「● 牝獅子と獵夫の話」 72 (A 414)

『通俗伊蘇普物語』の「第二百廿三 牝獅子と獵夫の話」に拠る。

39 「● 猿の自慢の話」 72 (A 14)

『通俗伊蘇普物語』の「第二百三十 猿の自慢の話」に拠る。

40 「● 獅子と野羊の話」 73 (A 338)

『通俗伊蘇普物語』の「第七十八 獅子と野羊の話」に拠る。

41 「● 驚黄金の卵を産む話」 74 (A 87)

渡部温『通俗伊蘇普物語』の「第七十九 驚黄金の卵を産む話」に拠る。

42 「● 蚊と牛の話」 75 (A 137)

『通俗伊蘇普物語』の「第六十九 蚊と牛の話」に拠る。

43 「● 乗馬と驢馬の話」 75 (A 565)

『通俗伊蘇普物語』の「第二百二十五 乗馬と驢馬の話」に拠る。

44 「● 蟻と鳩の話」 76 (A 235)

『通俗伊蘇普物語』の「第二百二十八 蟻と鳩の話」に拠る。

45 「● 谷川に立たた鹿の話」 77 (A 74)

『通俗伊蘇普物語』の「第一百七 谷川に立たた鹿の話」に拠る。

46 「● 盜賊と鶏の話」 78 (A 122)

『通俗伊蘇普物語』の「第二百十五 盜賊と鶏の話」に拠る。

47 「● 鹿と獅子の話」 79 (A 76)

『通俗伊蘇普物語』の「第二百十六 鹿と獅子の話」に拠る。

48 「● 兎と獵犬の話」 80 (A 331)

『通俗伊蘇普物語』の「第三十九 兎と獵犬の話」に拠る。

49 「● 海豚と鯨の話」 81 (A 62)

『通俗伊蘇普物語』の「第四十 海豚と鯨魚の話」に拠る。

50 「● 二足の犬の話」 81 (A 92)

『通俗伊蘇普物語』の「第二百四 二足の畜犬の話」に拠る。

51 「●馬と買客の話」 82 (A 237)

『通俗伊蘇普物語』の「第二百七 馬と買客の話」に
拠る。

52 「●兎と獅子の話」 83 (A 341)

53 「●狐と仮面の話」 84 (A 27)

『通俗伊蘇普物語』の「第四百 狐と仮面の話」に拠
る。

54 「●乱躁虫と鼻の話」 85 (A 142507)

55 「●獅子の病気の話」 86 (A 142507)

渡部温『通俗伊蘇普物語』の「第百 獅子の病気の
話」に拠る。

56 「●雀と兎の話」 87 (A 1473)

57 「●闘鶏と鷲の話」 88 (A 139281)

58 「●鷗と鳶の話」 88 (A 139281)

59 「●獅子と熊と狐の話」 89 (A 147)

『通俗伊蘇普物語』の「第九十九 獅子と熊と狐の話」
に拠る。

60 「●鳩と水瓶の話」 89 (A 390)

『通俗伊蘇普物語』の「第三十三 鴉と水瓶の話」
に拠る。

61 「●雀と教解の話」 90 (A 627)

『通俗伊蘇普物語』の「第二百廿二 小鳥の教解の話」
に拠る。

62 「●驢馬と陰の話」 92 (A 460)

『通俗伊蘇普物語』の「第百十一 驢馬の陰の話」に
拠る。

63 「●狐と樵夫の話」 93 (A 22)

64 「●狼と獅子の話」 94 (A 347)

65 「●羊の番をする牧童の話」 95 (A 10)

『通俗伊蘇普物語』の「第三十 牧童と狼の話」に
拠る。

66 「●鷲と鳥の話」 96 (A 2)

67 「●老たる犬の話」 97 (A 532)

『通俗伊蘇普物語』の「第十二 老たる犬の話」に拠
る。

68 「●鼠と蛙と鳶の話」 98 (A 384)

『通俗伊蘇普物語』の「第十五 蛙と鼠の話」に拠
る。

69 「●蠅と密壺の話」 99 (A 80)

『通俗伊蘇普物語』の「第二十 蠅と密壺の話」に拠
る。

70 「●獅子と鼠の話」 100 (A 150)

『通俗伊蘇普物語』の「第二十四 獅子と鼠の話」に
拠る。

71 「●犬と鶏と狐の話」 101 (A 252)

72 「●蛙と牛の話」 102 (A 376)

73 「●驢馬と蟋蟀の話」 103 (A 184)

『通俗伊蘇普物語』の「第五十 驢馬ときりぐすの
話」に拠る。

74 「●牝獅子の話」 104 (A 257)

- 『通俗伊蘇普物語』の「第五十六 牝獅子の話」に拠る。
- 75 「●母と狼の話」105 (A 158)
『通俗伊蘇普物語』の「第五十九 乳母と狼の話」に拠る。
- 76 「●猿と海豚の話」107 (A 73)
『通俗伊蘇普物語』の「第六十 猿と海豚の話」に拠る。
- 77 「●片眼の鹿の話」108 (A 75)
『通俗伊蘇普物語』の「第三十四 片眼の鹿の話」に拠る。
- 78 「●鶴と雁の話」108 (A 228)
『通俗伊蘇普物語』の「第六十七 鶴と雁の話」に拠る。
- 79 「●猫と鼠の話」109 (A 79)
『通俗伊蘇普物語』の「第七十三 猫と鼠の話」に拠る。
- 80 「●鹿と葡萄蔓の話」110 (A 77)
『通俗伊蘇普物語』の「第九十六 鹿と葡萄蔓の話」に拠る。
- 81 「●野羊と牧奴の話」111 (A 280)
『通俗伊蘇普物語』の「第一百七 野羊と牧奴の話」に拠る。
- 82 「●塩商と驢馬の話」112 (A 180)
『通俗伊蘇普物語』の「第一百十六 塩を背負った驢馬の話」に拠る。

- 83 「●児輩と蛙の話」114 (Aesopica にはない。James 本の 172 The Boys and the Frogs と同話)
『通俗伊蘇普物語』の「第一百十九 児輩と蛙の話」に拠る。
- 84 「●盲者と狼児の話」115 (A 37)
『通俗伊蘇普物語』の「第一百四十八 盲者と狼児の話」に拠る。
- 85 「●日輪を上訴した蛙の話」116 (A 314)
『通俗伊蘇普物語』の「第一百七十 獅子と海豚の話」に拠る。
- 86 「●鍛冶工と犬の話」116 (A 415)
『通俗伊蘇普物語』の「第一百七十 獅子と海豚の話」に拠る。
- 87 「●獅子と海豚の話」117 (A 145)
『通俗伊蘇普物語』の「第一百七十 獅子と海豚の話」に拠る。
- 88 「●秣槽のある犬の話」119 (A 702)
『通俗伊蘇普物語』の「第一百六十四 食牛と屠丁の話」に拠る。
- 89 「●牛と屠牛者の話」119 (A 290)
『通俗伊蘇普物語』の「第一百六十四 食牛と屠丁の話」に拠る。
- 90 「●亀と鷺の話」122 (A 230)
『通俗伊蘇普物語』の「第二百二十九 犬と羊の話」に拠る。
- 91 「●馬と蛙の話」123 (A 189)
『通俗伊蘇普物語』の「第二百二十九 犬と羊の話」に拠る。
- 92 「●犬と羊の話」124 (A 478)
『通俗伊蘇普物語』の「第二百二十九 犬と羊の話」に拠る。
- 93 「●放蕩者と燕の話」126 (A 169)
『通俗伊蘇普物語』の「第三十六 旅人と熊の話」に拠る。
- 94 「●熊と旅人の話」128 (A 65)
『通俗伊蘇普物語』の「第三十六 旅人と熊の話」に拠る。
- 95 「●庸医と蝦蟇」130 (A 289)
『通俗伊蘇普物語』の「第三十六 旅人と熊の話」に拠る。

「附録」

- 96 ●根津権現と車引の話」 3 (A 291)
- 97 ●二人の旅行者と斧の話」 6 (A 67)
- 98 ●守銭奴の話」 7 (A 225)
- 『通俗伊蘇普物語』の「第九十七 守銭虜の話」に拠る。
- 99 ●童子と盗人の話」 8 (A 581)
- 『通俗伊蘇普物語』の「第二百五 童子と盗人の話」に拠る。
- 100 ●親父と二人娘の話」 9 (A 94)
- 『通俗伊蘇普物語』の「第一百八十八 老爺と二人の愛女の話」に拠る。
- 101 ●山国の人と海の話」 10 (A 168)
- 『通俗伊蘇普物語』の「第一百八十九 山国の人と海の話」に拠る。
- 102 ●ランプの話」 11 (A 349)
- 『通俗伊蘇普物語』の「第六十三 灯火の話」に拠る。
- 103 ●橡櫛と蘆の話」 12 (A 70)
- 『通俗伊蘇普物語』の「第六十五 橡櫛と蘆の話」に拠る。
- 104 ●老人と死神の話」 13 (A 60)
- 『通俗伊蘇普物語』の「第九十二 老人と死神の話」に拠る。
- 105 ●北風と日輪の話」 14 (A 46)
- 『通俗伊蘇普物語』の「第四十三 風と日輪の話」に拠る。
- 106 ●寡婦と奴婢の話」 15 (A 55)
- 『通俗伊蘇普物語』の「第九十八 老寡婦と奴婢の話」に拠る。
- 107 ●一雙の壺の話」 16 (A 378)
- 『通俗伊蘇普物語』の「第七十五 一雙の壺の話」に拠る。
- 108 ●天文学者の話」 17 (A 40)
- 『通俗伊蘇普物語』の「第一百十八 天文学者の話」に拠る。
- 109 ●老婦と空壺の話」 18 (A 493)
- 『通俗伊蘇普物語』の「第一百四十三 老婆と酒壺の話」に拠る。
- 110 ●老婆と医者話」 20 (A 57)
- 『通俗伊蘇普物語』の「第一百五十一 老婆と医者話」に拠る。
- 111 ●田舎娘と牛乳壺の話」 23 (Aesopica にはない。James 本の 104 The Country Maid and her Milk-Can と同話)
- 『通俗伊蘇普物語』の「第一百六十三 田舎娘と牛乳壺の話」に拠る。
- 112 ●漁人水を敲く話」 24 (A 26)
- 『通俗伊蘇普物語』の「第一百六十七 漁人水を敲く話」に拠る。
- 113 ●人殺者の話」 25 (A 32)
- 『通俗伊蘇普物語』の「第二百廿六 兇殺人の話」に拠る。

に拠る。

以上、現在までに確認できた事例をリストアップした。中には一、二の図書館にしか所蔵を確認することができない文献も少なくない。子ども用読み物の多くは一度読み終えたらあとはお払い箱とばかりに忘れられる。安価であればなおさらであろう。例えば明治二〇年の『小学生修身教育昔話』は三錢五厘、二一年の『小学生修身教育』第一編は三錢である。因みに当時の物価を見ると、二四年のデータになるが、氷葡萄酒が四錢、サイホンラムネが三錢である。明治四〇年からの「少年お伽噺」シリーズ、四二年からの「絵入日本お伽噺」シリーズは、それぞれ一冊七錢である。四〇年のデータに依ると、一〇本入りの紙タバコは高価なナイルが二五錢、安いゴールデンバットが五錢である。こういった安価な本は多く読み捨てられていき、それ故に現在まで保存されることがまれなのだと想像される。このような当時の読書事情を考えると、散逸して今では確認できない書籍も相当数あったに違いない。事実既に見たように、シリーズ物では所在が不明の編次のものが多い。

右に挙げた出版社(者)は、東京・大阪・京都・名古屋と各地に亘っている。当然予想されるように東京が最多であるが、大阪も小川善善館、嵩山堂、安井兵助、赤志忠雅堂、文欽堂、浜本明昇堂、刀根松之助、積善館と八社(者)に上るのが目立つ。当時の出版事情には疎いので確言はできないが、地方出版社の場合は、販売地域

も限られ、従って読者も少数であったとも推定される。

編著者、出版社には、他の形でもイソップと関わりを持つているケースがあるので、そのことを付言しておく。

『経済説略』の編者渡部温は、いうまでもなく明治期に最も読まれ、それ故に与えた影響も大きい『通俗伊蘇普物語』の訳者である。『家庭童話母のみやげ』『教育童話子どもの樂園』の著者東基吉は、幼児教育・婦人教育のための月刊誌『婦人と子ども』に百近いイソップ寓話を連載している。「明治少年お伽噺」シリーズ、「絵入日本お伽噺」シリーズの中川柳涯には『ポケット伊蘇普物語』、『お伽百題』の編者馬場直美には『ポケット新訳イソップ物語』というイソップ寓話集がある。

出版社について見よう。『少年書類新伊蘇普物語』の博文館が刊行した雑誌『幼年雑誌』にはイソップの翻訳が三話掲載されている^{注四}。『家庭教育日本修身談』の積善館は『家庭教育小学修身はなし』(明治二四年一月)、『家庭教育幼年修身はなし』(明治二四二月)を出版している。この二つの『修身はなし』はタイトルからは予想できないが、イソップ寓話集である。この二つをまとめて翌年には『新訳伊蘇普物語』(明治二五年五月)の名で改めて刊行している。『少年お伽演説』『お伽百題』『新お伽十八番』の岡村書店は、先に述べたように『ポケット新訳イソップ物語』を刊行している。こちらは書店名が「岡村盛花堂」となっているが、住所も代表者名(岡村庄兵衛)も同じであり、事実上同一出版社である。

以上の結果を次ページ以下の表にまとめた。

注

- 一 吉見孝夫『『経済説略』『生産道案内』『経済要旨』のイソップ寓話』（『イソップ資料』第一号、二〇一八年一〇月）
- 二 大久保編本の底本である『絵入朝野新聞』連載の本文は左記の小論に載っている。
吉見孝夫『『絵入朝野新聞』に連載された『伊曾保物語』（『イソップ資料』第四号、二〇一四年三月）
- 三 『婦人と子ども』中のイソップ寓話本文は左記の小論に載っている。
吉見孝夫『明治期の雑誌に載ったイソップ寓話』（『イソップ資料』第一号、二〇一八年一〇月）
- 四 『幼年雑誌』中のイソップ寓話本文は注三文献に載っている。

明治期寓話集等掲載イソップ寓話対照表

- 1 寓話の配列は B. E. Perry の *Aesopica* の番号に従った。*Aesopica* にない寓話は、James 本の番号を「J59」のように略記した。James 本、Townsend 本にもなく、Stickney 本あるいは仮名草子『伊曾保物語』にある寓話は、それぞれ「S5」「伊・中 40」のように略記した。
- 2 *Aesopica* のタイトル名は、1～471 は中務哲郎訳『イソップ寓話集』（岩波書店、1999 年 3 月）に、472～579 は岩谷智・西村賀子訳『イソップ風寓話集』（国文社、1998 年 1 月）に従った。ただし、漢字表記は極力常用漢字の範囲にとどめるため改めた。他は Perry の *Babrius and Phaedrus* (Harvard University Press, 1965) の英文タイトルを和訳した。
- 3 各文献には、次のような略記を用い、寓話掲載箇所を以下のように示した。
 経済：『経済説略』（『生産道案内』『経済入門 一名生産道案内』『経済要旨』）。Lesson を漢数字で、Part を算用数字で示す。
 童蒙：『童蒙教草』。章を算用数字で示す。
 西稚：『西洋稚児話の友』。丁付を算用数字で示す。
 西童：『西洋童話』。丁付を算用数字で示す。
 西杖：『西洋教の杖』。巻を漢数字で、寓話番号を算用数字で示す。
 修勸：『修身勸』。篇を「初」「次」「三」で、丁付を算用数字で示す。
 日西：『日本西洋昔噺』（『通俗絵入学芸独案内』）。ページを算用数字で示す。
 小昔：『小学生徒教育昔噺』。巻を漢数字で、丁付を算用数字で示す。
 修昔：『小学生徒修身教育昔話』。ページを算用数字で示す。
 修教：『修身之教』。ページを算用数字で示す。
 修噺：『小学生徒修身教育噺』。編を漢数字で、ページを算用数字で示す。
 西日：『西洋日本昔噺』。ページを算用数字で示す。
 修は：『家庭教育修身はなし』。ページを算用数字で示す。
 尋常：『尋常小学生徒教育』（『尋常小学生徒修身話』）。ページを算用数字で示す。
 児童：『児童教育智恵の宝』。ページを算用数字で示す。
 子を：『子供のをしえ』。ページを算用数字で示す。
 通俗：『通俗修身談』（『教育修身談』『教育修身美談』）。ページを算用数字で示す。
 面白：『面白叢談』。ページを算用数字で示す。
 書類：『少年書類新伊蘇普物語』。寓話番号を算用数字で示す。
 少仏：『少年仏教修身はなし』。ページを算用数字で示す。
 日修：『家庭教育日本修身談』。ページを算用数字で示す。
 教幼：『教育幼稚の宝』。「新教育演説」「滑稽子供演説」「少年必携子供伊蘇普」「少年教育博物ばなし」「少年必携教育幻灯会」「小学生徒少年倶楽部」「少年教育智恵かぐみ」「少年必携教育一口話」をそれぞれ「新」「滑」「伊」「博」「幻」「俱」「智」「一」で、ページを算用数字で示す。
 実伝：『伊蘇普実伝』。ページを算用数字で示す。
 英詩：『文学叢書 英詩文評釈』（『英文評釈』）。ページを算用数字で示す。
 母み：『家庭童話母のみやげ』。寓話番号を算用数字で示す。
 子楽：『教育童話子供の楽園』。寓話番号を算用数字で示す。
 少伽：『少年お伽噺』シリーズ。編を算用数字で示す。
 明伽：『明治少年お伽噺』シリーズ。編を算用数字で示す。
 絵伽：『絵入日本お伽噺』シリーズ。編を算用数字で示す。
 演説：『少年お伽演説』。ページを算用数字で示す。
 百題：『お伽百題』。寓話番号を算用数字で示す。
 十八：『新お伽十八番』。寓話番号を算用数字で示す。
 動物：『少年教育修身はなし 動物の巻』。ページを算用数字で示す。

Aesopica等の番号とタイトル	掲載文献と掲載箇所
1 ウシとキツネ	修動(次19ウ)
2 ウシとコクマルガラスと羊飼	通俗(41)・動物(38)・動物(96)
6 ヤギ飼いと野生のヤギ	修教(82)
9 井戸の中のキツネとヤギ	修動(次6ウ)・動物(57)
10 ライオンを見たキツネ	小昔(三7才)・修動(二5)・子を(9)・教幼(幻32)・動物(61)
11 笛を吹く漁師	尋常(34)
12 キツネとヒョウ	日西(13)・修教(20)・児童(14)
14 家柄を競うキツネと猿	修動(三28ウ)・動物(72)
16 猫と鶏	日西(8)
17 しっぽのないキツネ	西稚(10才)・修教(48)・児童(10)
18 漁師とニンシ	小昔(四7才)・修は(57)
22 キツネときこり	小仏(52)・動物(93)
24 腹のふくれたキツネ	修動(初27ウ)・教幼(俱24)・少伽(18)
26 水を打つ漁師	動物(附24)
27 キツネとモルモットの面	絵加(68)・動物(84)
29 炭屋と洗濯屋	絵加(62)
31 ロマン・グレーと二人の愛人	小昔(一2ウ)
32 人殺し	修動(初25ウ)・修動(二13)・通俗(7)・百題(51)・動物(附25)
33 ほら吹き	小昔(一6ウ)・百題(14)
35 人間とサテュロス	修動(次22ウ)・日西(18)・修教(38)・修動(五5)
37 目の見えぬ人	修教(66)・動物(115)
40 天文学者	修動(五14)・西日(64)・百題(72)・動物(附17)
42 農夫と息子たち	童蒙(4イ)・西稚(6ウ)・西杖(三5)・修動(次18ウ)・絵加(1)・百題(95)
43 水を搾るカエル	西稚(5才)・西杖(二13)・修教(12)・動物(71)
44 王様を欲しがめるカエル	童蒙(12木)・修動(次33ウ)・日西(20)・尋常(6)・少伽(11)
45 牛と車輪	西稚(2才)
46 北風と太陽	童蒙(16イ)・小昔(一5ウ)・教幼(博16)・百題(11)・動物(附14)
51 農夫と蛇	修動(三7ウ)
53 兄弟げんかする農夫と息子	西日(84)・英詩(15)・母み(6)
55 女主人と召し使い	修動(一19)・動物(附15)
57 老婆と医者	修教(54)・尋常(32)・百題(6)・動物(附20)
58 女とメンドリ	日西(17)・子楽(8)・百題(76)
60 老人と死に神	絵加(95)・百題(15)・動物(附13)
62 イルカとハゼ	西日(28)・動物(81)
65 旅人とクマ	西杖(一16)・修動(次9ウ)・日西(29)・家庭(86)・尋常(13)・子楽(5)・明伽(6)・百題(57)・動物(128)
67 旅人とおの	西杖(二1)・修動(次11ウ)・教幼(一44)・動物(附6)
70 カシとアシ	修動(五15)・西日(60)・母み(2)・百題(67)・動物(附12)
73 イルカと猿	日西(24)・修教(40)・児童(10)・動物(107)
74 水辺の鹿	修動(次2ウ)・日西(1)・修動(三2)・教幼(博24)・少伽(14)・演説(83)・動物(77)
75 片目の鹿	西日(26)・百題(82)・動物(108)
76 鹿と洞穴のライオン	修教(80)・動物(79)
77 鹿とブドウ	修動(一18)・西日(44)・教幼(幻28)・動物(110)
79 猫とネズミ	動物(109)
80 ハエ	童蒙(10イ)・小昔(四4才)・西日(29)・動物(99)
81 王に選ばれた猿とキツネ	修教(10)・百題(90)
83 踊る猿とラクダ	日西(14)・小昔(一4ウ)・修教(120)・動物(68)
85 子豚と羊	西日(37)
87 金の卵を生むガチョウ	童蒙(12イ)・西稚(2ウ)・修動(五11)・西日(52)・少伽(15)・動物(74)
91 じゃれつくロバと主人	西杖(三6)・修動(三6ウ)・小昔(六1ウ)・少伽(31)・百題(34)・動物(63)
92 二匹の犬	修動(三2ウ)・動物(81)
94 父親と二人娘	小昔(四6才)・修動(一11)・動物(附9)
97 ヤギと笛を吹くオオカミ	西日(65・77)
98 屋根の上の子ヤギとオオカミ	西日(30)・動物(61)
112 アリとセンテコガネ	経済(六2)・童蒙(13イ)・修動(初1ウ)・日西(2)・修昔(7)・尋常(1)・通俗(3)・通俗(30)・少伽(25)・百題(9)・動物(4)・動物(27)
117 角を欲しがめるラクダ	修動(三15ウ)・動物(66)
122 泥棒とオンドリ	修動(初29ウ)・動物(78)
124 カラスとキツネ	修動(初28ウ)・日西(4)・少伽(9)・教幼(智44)・子楽(2)・百題(26)・動物(69)
125 ハシボソガラスとカラス	動物(70)
130 胃袋と足	経済(七3)・修動(次3ウ)・通俗(40)・少伽(36)
133 肉を運ぶ犬	修動(次4ウ)・少伽(4)・教幼(博34)・母み(9)・少伽(20)・演説(23)・百題(30)・動物(51)
135 腹をすかせた犬	教幼(新34)・絵加(32)・百題(12)
137 蚊と牛	小昔(七7才)・修動(一15)・西日(54)・動物(75)
138 ウサギとカエル	絵加(48)・百題(94)・動物(66)
139 カメとトビ	修教(84)・児童(12)・動物(88)
140 恋するライオン	西日(5)・少伽(50)・少伽(22)・絵加(18)
142 老いたライオンとキツネ	修動(次7ウ)・百題(5)・動物(86)
145 ライオンとイルカ	修動(一6)・動物(117)
147 ライオンとクマ	動物(89)
148 ライオンとウサギ	絵加(57)・百題(99)
150 ライオンとネズミの恩返し	西稚(8才)・修動(次21ウ)・母み(3)・演説(121)・百題(92)・動物(100)
153 オオカミと羊	実伝(26)・動物(64)
155 オオカミと子羊	西杖(二4)・修教(46)・通俗(43)・動物(39)
156 オオカミとサギ	西稚(26ウ)・修動(初24ウ)・日西(6)・尋常(34)・少伽(61)・母み(5)・少伽(13)・絵加(3)・動物(53)
157 オオカミとヤギ	修動(一9)・西日(32)
158 オオカミと老婆	小昔(四2ウ)・修動(一17)・動物(105)
160 けがをしたオオカミと羊	西日(58)・少伽(19)・動物(56)
168 遭難者と海	修動(一7)・動物(附10)
169 放蕩(ほうとう)息子とツバメ	動物(126)
172 コウモリとイタチ	通俗(13)・明伽(11)・動物(17)
173 きこりとヘルメス	修動(二2)・少伽(1)

174	旅人と運の女神	修勸(三三ウ)・小昔(四一ウ)・小昔(五七才)・修晰(一20)
175	旅人とブラタナス	修勸(三二ウ)・修晰(一4)・尋常(三1)・百題(31)
179	ロバと庭師	尋常(17)・絵伽(135)
180	塩を運ぶロバ	修勸(次16ウ)・修晰(一27)・子案(6)・絵伽(135)・百題(97)・動物(112)
181	ロバとラバ	少伽(5)・演説(126)
182	神像を運ぶロバ	少伽(14)・動物(55)
184	ロバとセミ	修晰(一23)・動物(103)
186	ロバとロバ追い	日西(23)・西日(48)
187	オオカミの医者	日西(27)
188	ライオンの皮を被ったロバ	教幼(博18)・百題(52)
189	ロバとカエル	動物(123)
191	ロバとキツネとライオン	西日(62)・母み(7)
194	猟師とコウノトリ	西杖(三8)・小昔(四4ウ)・少伽(33)・動物(67)
200	盗みをする子と母親	尋常(5)
201	のどの渴いたハト	教幼(幻34)・百題(16)
203	猿と漁師	修勸(初31ウ)・教幼(新46)
207	羊飼いと海	教幼(新16)
210	羊飼いのいたずら	童蒙(26イ)・小昔(三1ウ)・西日(104)・尋常(41)・子を(5)・少伽(6)・百題(73)・十八(17)・動物(95)
211	水浴びをする子供	日西(16)・修晰(一25)
212	毛を刈られる羊	西日(14)
213	ザクロとリンゴとイバラ	修教(88)
214	モグラ	修勸(三13ウ)
218	猿の子供	修勸(三33ウ)・通俗(38)・動物(34)
225	守銭奴	修は(6)・百題(80)・動物(附7)
226	カメとウサギ	修勸(三1ウ)・小昔(五1ウ)・尋常(11)・子を(4)・面白(154)・少伽(22)・日修(44)・教幼(清28)・母み(4)・母み(唱歌)・少伽(16)・百題(68-2)・動物(52)
227	ツバメと蛇	西日(8)
228	ガチョウとツル	動物(108)
230	カメとワシ	西童(6才)・西杖(三17)・修勸(初10ウ)・小昔(六5才)・尋常(31)・動物(122)
234	オオカミと羊飼いの	修勸(次8ウ)・少伽(54)
235	アリとハト	修勸(初8ウ)・修晰(二14)・修は(32)・尋常(3)・書類(66)・教幼(新40)・子案(3)・動物(76)
237	ロバを賣う男	修勸(三8ウ)・小昔(一1ウ)・修教(50)・動物(82)
252	犬と猫とキツネ	尋常(40)・百題(100)・動物(101)
255	蚊とライオン	演説(45)・百題(33)
257	ライオンとキツネ	小昔(七5ウ)・修晰(二11)・母み(8)・動物(104)
258	病気のライオンとオオカミとキツネ	明伽(4)
260	うぬぼれオオカミとライオン	子案(7)・絵伽(3)
265	猟師と山ウズラ	教幼(幻44)
276	射られたワシ	修勸(三3ウ)・動物(59)
280	ヤギとヤギ飼いの	教幼(幻20)・動物(111)
281	タナグラのオンドリ	修勸(初23ウ)・動物(88)
282	漁師と魚	西日(47)
285	神像をたたきつづいた男	修教(42)・通俗(42)・絵伽(1)
287	アラブ人とラクダ	西日(36)
288	クマとキツネ	動物(63)
289	カエルのお医者	少伽(12)・百題(41)・動物(130)
290	牛と肉屋	動物(119)
291	牛追いとヘラクレス	童蒙(5イ)・修勸(初32ウ)・小昔(七2ウ)・動物(附3)
294	ツルとクジャク	修勸(初3ウ)・教幼(博28)・明伽(8)
297	農夫とツル	修勸(初26ウ)
302	カシノキとゼウス	教幼(伊42)
305	病気の鹿	日西(35)・修教(52)・修教(116)・児童(14)・少伽(48)
314	太陽とカエル	西日(50)・動物(116)
319	馬と馬丁	通俗(7)・動物(7)
320	馬と兵士	絵伽(27)
322	カニと母親	修は(26)・百題(84)
324	病気のカラス	少伽(7)
325	ヒバリと農夫	童蒙(5ロ)・西稚(11ウ)・西日(107)
326	臆病(おくびょう)な猟師	修晰(一22)・教幼(博42)・百題(18)
328	宴会に招かれた犬	百題(89)
331	犬とウサギ	日西(11)・小昔(五4ウ)・子案(9)・動物(80)
338	ライオンとイノシシ	西日(56)・動物(73)
339	ライオンと野生のロバ	修晰(一2)
340	ライオンと射手	修教(24)
341	狂えるライオンと子鹿	動物(84)
342	オオカミと犬の和解	百題(13)
346	オオカミと肥えた犬	尋常(29)
347	オオカミとライオン	日西(10)・西日(40)・教幼(新44)・動物(94)
349	ランブ	小昔(七1ウ)・修晰(二12)・西日(21/5)・百題(88)・動物(附11)
352	田舎のネズミと町のネズミ	童蒙(12ハ)・修勸(初9ウ)・尋常(8)・少伽(4)
355	旅人と真実の女神	修教(60)
357	馬をうらやむロバ	小昔(二3才)・西日(42)・絵伽(84)
370	ラッパ兵	修勸(次12ウ)・日西(33)
372	三頭の牛とライオン	少伽(45)
373	セミとアリ	経済(六2)・童蒙(13イ)・修勸(初1ウ)・日西(2)・修昔(7)・尋常(1)・通俗(3)・通俗(30)・少伽(25)・百題(9)・動物(4)・動物(27)
375	はげ頭の騎手	教幼(博20)
376	自分を膨らませるヒキガエル	修勸(次17ウ)・尋常(10)・母み(1)・動物(102)
378	二つのつば	修晰(一14)・西日(82)・絵伽7(47)・動物(附16)
384	ネズミとカエル	修勸(次34ウ)・日西(31)・小昔(二4ウ)・尋常(2)・少伽(28)・子案(1)・動物(98)
390	ハンソツガラスと水差し	教幼(智46)・絵伽(16)・演説(115)・百題(22)・動物(89)
394	ライオンの子分のキツネ	修晰(一26)・動物(65)
398	カラスと白鳥	少伽(3)

403 狼師と犬	小昔(六3才)・百題(81)・動物(56)
412 川と海	西日(80)
414 雄牛と母ライオンとイノシシ	修教(86)・修晰(二4)・教幼(博26)・動物(72)
415 犬と鍛冶屋	動物(116)
426 キツネとツル	西稚(3才)・西童(19ウ)・修動(次15ウ)・通俗(52)・子案(4)・少伽(21)・百題(8)・動物(45)
451 羊の皮を着たオオカミ	西日(35)
460 ロバの陰	動物(92)
468 月と母親	教幼(伊40)
472 高慢ききなカラスとクジャク	童蒙(8イ)・修動(次10ウ)・尋常(18)・少仏(39)・教幼(幻10)・少伽(17)・百題(68)・動物(60)
473 ウサギに講釈するスズメ	動物(87)
476 ロバと羊飼いのじいさん	絵伽(61)
478 羊と犬とオオカミ	動物(124)
481 おいぼれのライオンとイノシシとウシとロバ	西日(102)
486 トンビとハト	通俗(51)・動物(43)
490 ワシとカラス	教幼(博14)・絵伽(16)
493 酒つぼと老婆	修晰(一16)・動物(附18)
499 姉と弟	修動(三17ウ)・小昔(二5ウ)・修晰(一2)
503 ニワトリのヒナと真珠	教幼(博10)
507 セミとフクロウ	動物(85)
514 王様になったライオン	西日(55)・動物(58)
521 アリとハエ	修動(初30ウ)・修昔(12)・尋常(19)・通俗(39)・動物(36)
532 老犬と狩人	動物(97)
562a オンドリとキツネ	修動(三26ウ)・小昔(二1ウ)
565 尊大な馬	小昔(二3才)・修昔(14)・西日(42)・絵伽(84)・動物(75)
566 コウモリ	修動(次5ウ)・小昔(五5ウ)・修昔(9)・修晰(二7)・修は(71)・尋常(12)・少仏(16)・子案(10)・明伽(11)・百題(96)
569 サルの王様	尋常(24)・百題(87)
581 少年と泥棒	修動(初11ウ)・小昔(五3才)・動物(附8)
613 ネズミ、猫のことを協議する	小昔(三3才)・尋常(14)・通俗(50)・少仏(1)・母み(10)・少伽(2)・絵伽(18)・百題(63)・動物(41)
617 男の胸の中の蛇	動物(62)
619 相手を求めるネズミ	演説(69)
627 ナチンゲールのフィロメラと船頭	修動(初5ウ)・通俗(54)・動物(48)・動物(90)
640a 竜と小作人	修動(初6ウ)
656 ツバメとスズメたち	童蒙(17イ)
671 キツネとハト	修動(初2ウ)・通俗(36)・動物(31)
678 子鹿に教える親鹿	百題(70)
699 オオカミの不運	修教(58)
702 飼い葉おけの犬	動物(119)
719 飼い主に骨を乞う犬	実伝(12)
721 父親と息子とロバ	西稚(13才)
J59 木々とオノ	百題(93)
J104 田舎娘と牛乳ツボ	西童(14才)・修動(三9ウ)・絵伽(81)・動物(附23)
J130 少年とイラクサ	西稚(6才)
J147 少年とハシハミ	小昔(二6ウ)・百題(4)
J161 生垣とブドウ畑	西日(33)・教幼(博22)
J172 少年たちとカエル	童蒙(1イ)・小昔(三6才)・教幼(幻40)・動物(114)
S5 太鼓と香草の花瓶	修動(三10ウ)
S88 猿と猫	西童(4才)
S97 アラビア人とラクダ	修は(64)・尋常(23)
伊・中40 シン主とロバのこと	修教(56)・児童(12)
伊・下27 かわらけ慢氣を起すこと	修動(次46ウ)・通俗(56)
伊・下34 出家と盗人のこと	尋常(20)
イソップ伝(イソップが町までどのくらいかかるかと尋ねられる話)	百題(27)